

作法乃槩

完

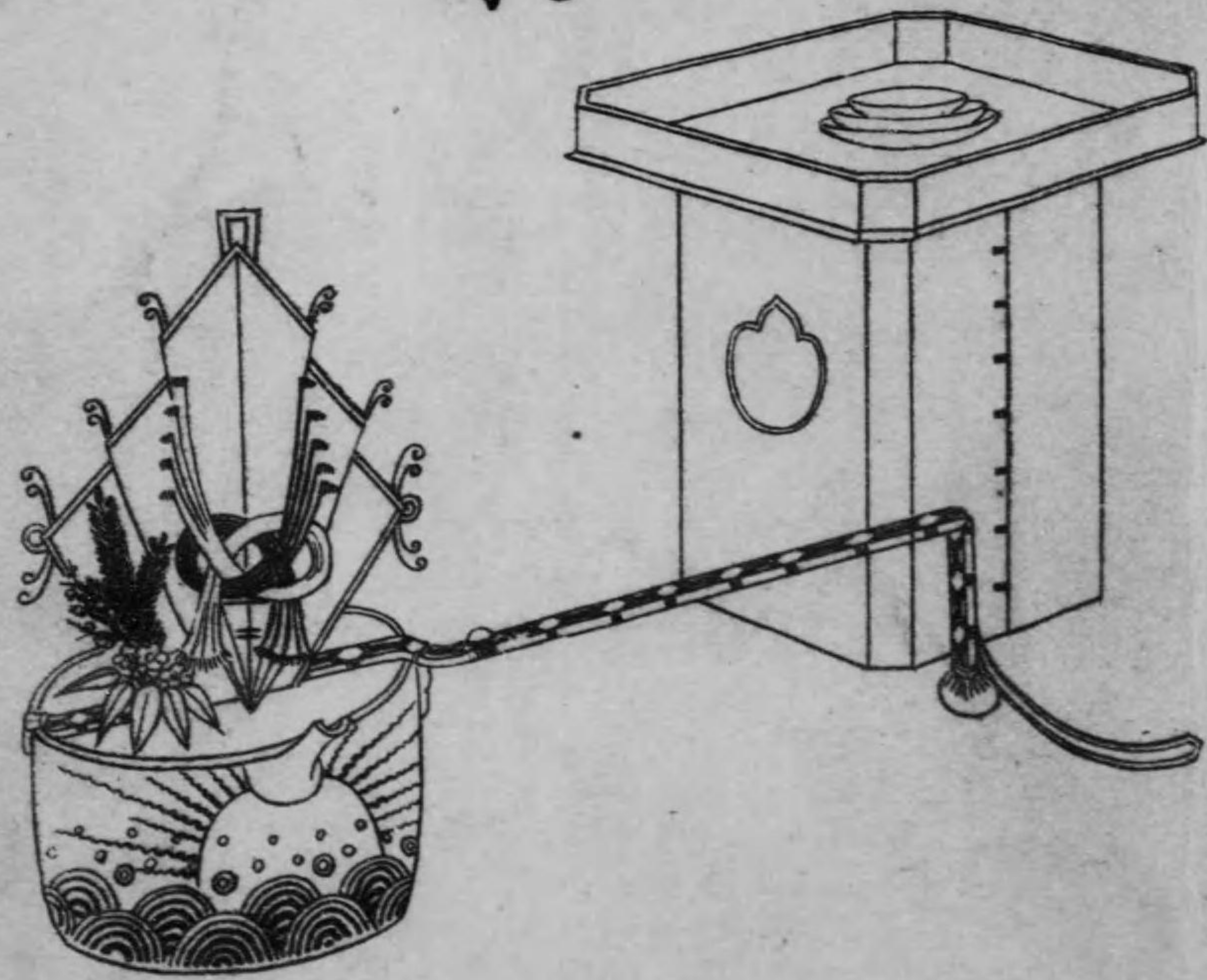
11
560

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



作法乃聚



11-560

作法の栞

福岡縣知事安河内麻吉閣下題字
筑紫高等女學校長水月哲英先生序文

荻

原

大正

11. 4. 20

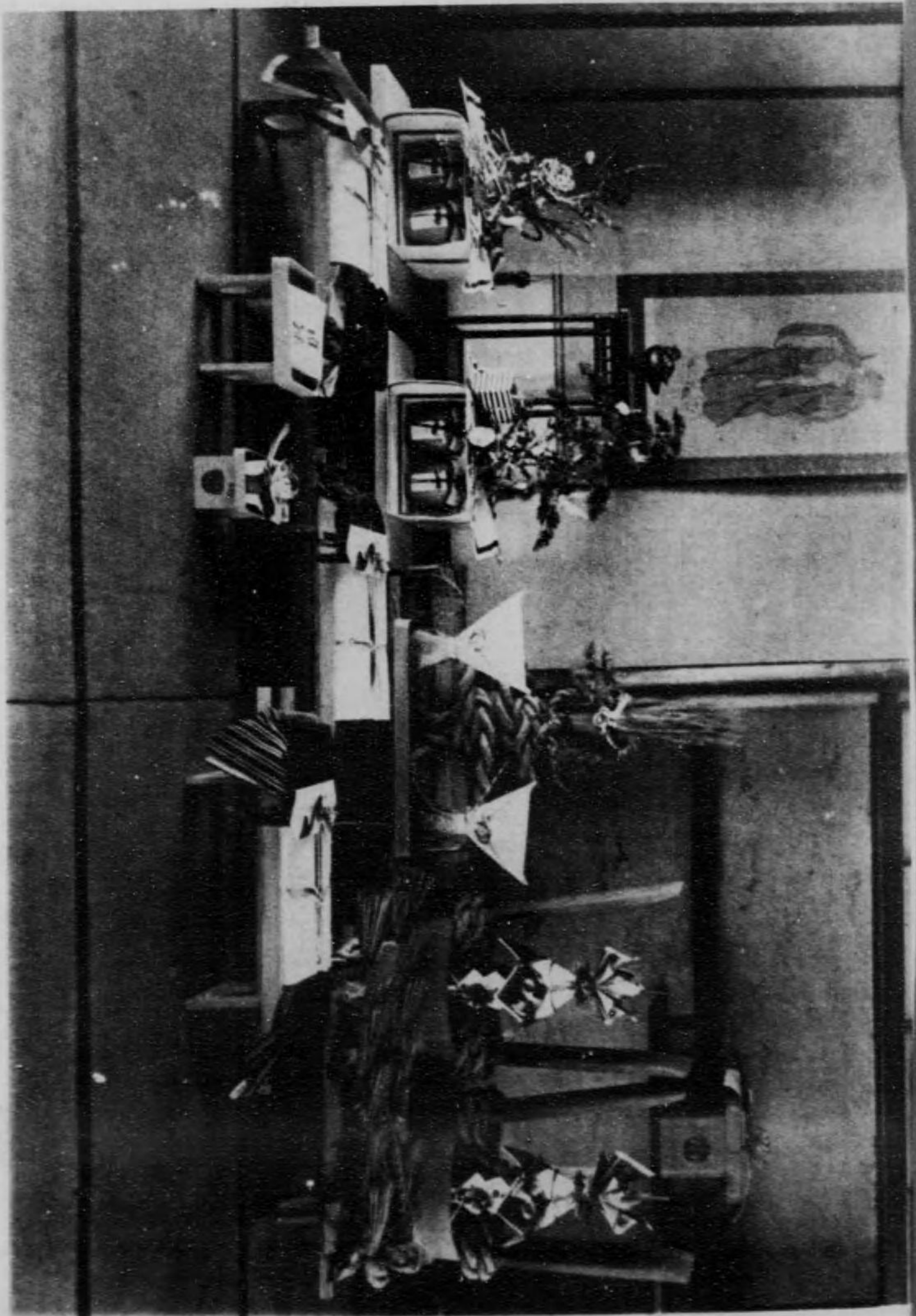
内 菱 著

福岡 禮節學修院藏版

敬
啟

雅
於

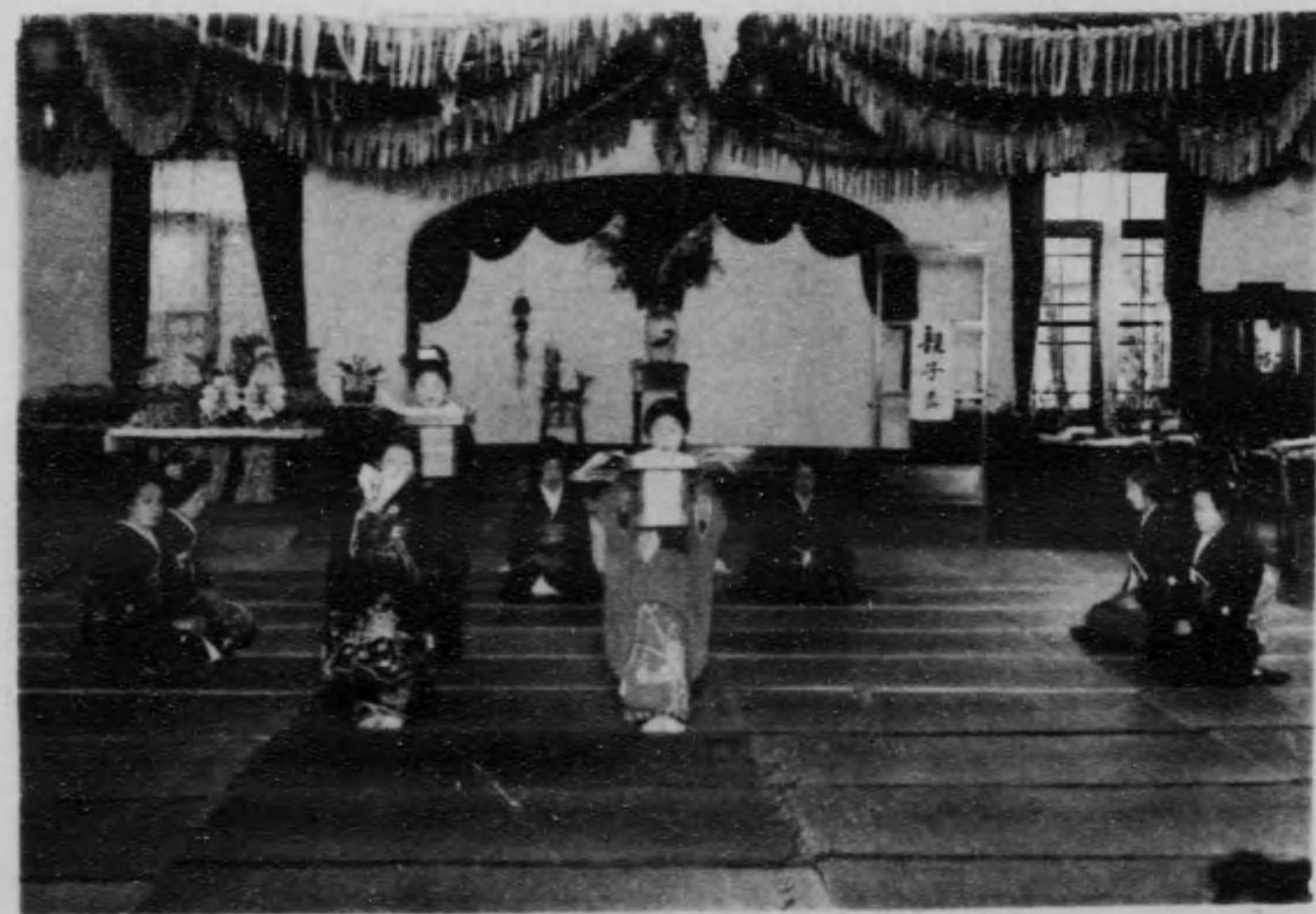




飾の納結



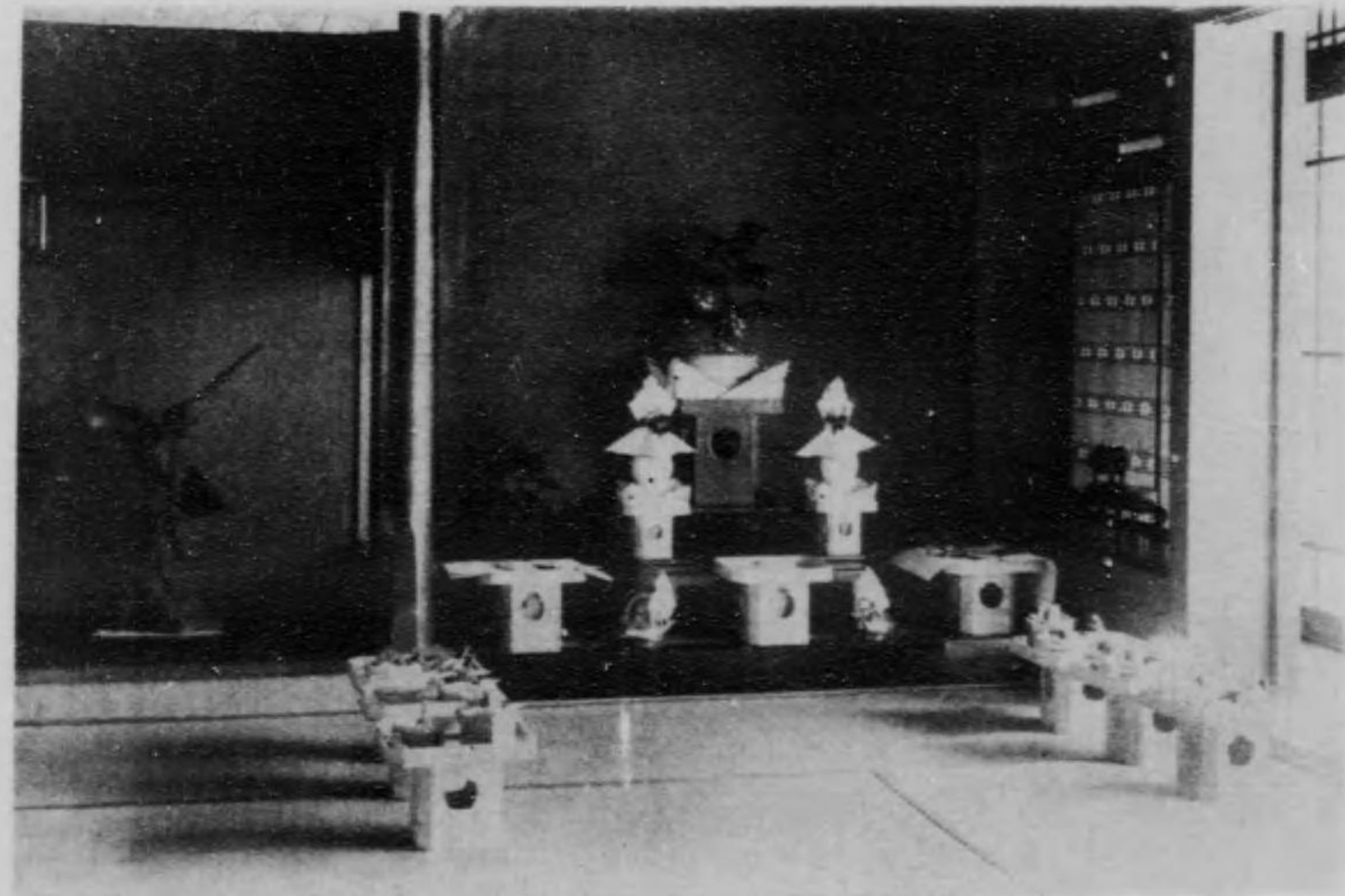
婚 禮 の 盃



親 子 の 盃



盃の出里



飾の前神

作法の棊目次

第一節 日常の心得

| | |
|-------|----|
| 皇室及御旗 | 一 |
| 家庭 | 二 |
| 服装 | 四 |
| 言語 | 四 |
| 訪問 | 六 |
| 食事 | 七 |
| 賀壽 | 八 |
| 贈物 | 九 |
| 出産 | 一〇 |
| 服忌 | 二 |
| 服忌令 | 二 |

第二節 座禮

| | |
|----------|---|
| 座禮の態度 | 三 |
| 座禮拜儀 | 四 |
| 起居進退 | 五 |
| 人前を通る禮 | 六 |
| 兩側人仲を通る禮 | 六 |

第三節 立禮

| | |
|----------|----|
| 立禮の態度 | 七 |
| 立禮拜儀 | 七 |
| 行歩進退 | 八 |
| 人前を通る禮 | 九 |
| 兩側人仲を通る禮 | 九 |
| 室内行逢の禮 | 一〇 |
| 室外行逢の禮 | 一〇 |

道路行逢の禮……………二二
 洋傘及物品携帶行逢の禮……………二二
 椅子に倚る禮……………二三
 椅子を離る禮……………二三
 襖開閉の禮……………二三
 同上略式……………二四
 障子開閉の禮……………二四
 扉開閉の禮……………二五
 簾及幕出入の禮……………二五

第四節 客接待の禮

取次……………二六
 座布圍出方及受方……………二六
 火鉢出方及受方……………二七
 蓆盆出方及受方……………二八
 お茶出方及受方……………二九
 菓子出方及受方……………二九
 團扇出方及受方……………三〇

扇子出方及受方……………三二
 手紙渡方及受方……………三二
 白紙出方及受方……………三三
 塵紙出方及受方……………三三
 料紙及硯箱出方及受方……………三三
 尺八出方及受方……………三三
 横笛出方及受方……………三三
 書冊及新聞出方及受方……………三四
 卒業證書受方……………三四
 小刀出方及受方……………三四
 手水出方及受方……………三五
 刀及サール出方及受方……………三五
 手袋出方及受方……………三六
 碁盤及將棋盤出方……………三六
 ステツキ出方及受方……………三六
 傘類出方及受方……………三七
 帽子出方及受方……………三七
 提灯出方及受方……………三七

卓上へ物品出方……………三七
 洋食の出方及食方……………三九

第五節 膳部の進撤

千鳥掛膳……………四〇
 一行列膳……………四一
 二行列膳……………四一
 上座歸膳……………四一
 本、二、三膳及食方……………四二
 配膳の位置圖解……………四四
 配膳の順序……………四五

第六節 雑の部

羽織及袴の着せ方……………四六
 洋服の着せ方……………四七
 饅頭の食べ方……………四七
 串の物食べ方……………四七
 玉串の捧げ方……………四八

焼香の仕方……………四八

第七節 婚禮

仲介人……………四九
 見合……………四九
 鯨尺取替し……………五〇
 結納……………五〇
 結納目録の書式……………五一
 結納受取目録の書式……………五一
 土産目録の書式……………五二
 荷物覺書の認め方……………五三
 荷物受取書の認め方……………五三
 目録の事……………五四
 結納使者の口上……………五四
 結納受方舅の口上……………五四
 里出の盃……………五五
 當日の仲人……………五五
 嫁入の行列……………五五

| | |
|--------------|----|
| 正式場の床飾 | 五七 |
| 略式場の床飾 | 五七 |
| 出迎へ | 五七 |
| 略式婚禮式 | 五七 |
| 本式婚禮式 | 五九 |
| 御鬘斗の出力 | 六二 |
| 親子の盃 | 六三 |
| 總客席 | 六四 |
| 寢所の盃 | 六五 |
| 盃の順序一覽 | 六六 |
| 里出の盃 | 六六 |
| 三三九度の盃(正式) | 六六 |
| 同上(略式) | 六七 |
| 親子の盃 | 六七 |
| 寢所の盃 | 六七 |
| 總客席の盃 | 六八 |
| 婚禮式の献立(正式の一) | 六八 |
| 同上(正式の二) | 六九 |

| | |
|--------------|----|
| 婚禮式の献立(略式の一) | 六九 |
| 同上(略式の二) | 七〇 |
| 座席の配置圖解 | 七〇 |
| 台盃正式の順序 | 七一 |

第八節 高等科

| | |
|------------------|----|
| 貴人の前に伺候 | 七四 |
| 座禮 | 七四 |
| 立禮 | 七五 |
| 卓上に茶菓の進撤 | 七五 |
| 扇子に物品を載せ奉る禮 | 七六 |
| 軸物取扱方 | 七七 |
| 床の間の視方(軸物、生花、巻物) | 七九 |

序

人を敬ふ眞心、即ち恭敬の誠を一定の態度に由りて外に表はすものを禮儀と名づくるので、苟も萬物の靈たる人である以上は必ず心得て置かねばならぬものである。此恭敬の誠は無くして唯表面に見ゆる所だけに止まりたならば虚禮になります。世には四角四面に固くなることを禮法と思つて居る人もあるが、「禮の用は和を以て貴しとす」で、互に感情を融和するためのもものが、却つて疎隔の媒介物になるやうでは禮の趣旨には契ひませぬ。そこで虚禮に流れず固くならず亂れず融通自在にして、而も交際を圓滿にし社會の秩序を整ふ所に禮の妙所が在るので、此妙所に達するには、禮の修養練習が必要です。斯様な必要あるに拘らず適當なる教本無いのは教育上遺憾の至りであつた。然るに曩

きに東京市大日本婦人正風會に就いて久しく斯道を研究された萩原氏が福岡に歸りて同會支部禮節學修院を開いて數千人に教授し、又各學校に聘せられて斯道教授に深い經驗を積まれてから此書を著はされたので、裨益する所多い簡にして要を得た書のできたことを深く喜びます。

大正十一年一月

水 月 哲 英

禮の精神

世の中が啓けて行きますにつけて教育の道も日に月に盛んになつて参りました。殊に近き十數年來にをきまして、女子教育の發達し來ました事は著るじいものであります、是れは洵に國家の爲め悦ばしき事と存じます。然るに人として殊に御婦人方として、いとも尊み、いとも重んじなければならぬ、禮儀作法は怎で御座いませうか、世間には幾歳の間數々の高恩を蒙りました、師の君に對してすら年に一度の年始の賀詞さへも述べないお方がございます、遠隔の地とあれば賀狀に致しましても宜しい、半襟一つを節約しますれば幾年分ございませう。又教育あるお方であつて目上の人に對して口答へをするとか、姫御前のあられもない言葉争ひ、さては細

帯一つで人様の前に平氣で出るとか、一々數へ舉れば數限りもない無作法を目にし
耳にする事があります、かぶれて新しがるのみが今日の婦人ではありますまいかと
存じます。抑も禮儀作法なるものは人が此の世に生存する以上は是非とも必要缺ぐ
べからざるものであります。此禮の道を守らなければ、内には一家の幸福を得、外
には社會の公安、國際間の圓滿を保つ事は出來ないのであります。去れば古へから
禮を以て人士の修むべき第一義として仁義禮智信、を五常と云ひ、禮樂射御書數を
六藝と稱へて孰れも重要な二様の意義に解せられてあります。して此五常の内の
禮は即ち心の禮、六藝の内の禮は容の禮乃ち作法に屬するのであります。論語の爲
政編に「道レ之、以レ德、齊レ之、以レ禮、有レ恥且格」と孔子が説かれてあります、即ち一
國の政治は徳と禮とを本とする事を教へられたのであります。今の世の總ての人が

眞の禮の道を尊重し行ひますれば六ツかしい法律など半ば不用になる事と思はれま
す。なせかなれば禮儀作法なるものは、人に對する敬愛即ち人を敬ひ人を愛する心
が内に充ち満ちて其念が形や行ひに表れるのであります。此敬愛の念是れが即ち禮
の精神なのであります。お悔みを述べるにしても、靈前に焼香するにしても、單に
形式のみでは何にもなりません、衷心お氣の毒であつた、惜しむべき事であつたと
誠意を以てすれば、自然と頭が下り手が動くものであります。此精神の發露是れが
即ち生命ある眞の禮儀作法であります。然らば怎麼にして修養するかと申せば、色
々ありませうが一口に申しますれば『陰陽なく、己を欺かす人をも欺かす、心を正
しくする』にあると思ひます。

此書は本院にて私が教へます通りを綴りましたのであります、復習をなさるにして

も、稽古をなさるにしても前に述べました、禮の精神てふ事を寸時もお忘れなく、
日常行はれむ事を切に希望致します。

大正十年十一月三日

創立十四年記念の日記す

禮節學修院長 萩原 薫

作法の葉

第一節 日常の心得

皇室及御旗

皇室の御事について談話する時は謹み慎みて凡て敬語を用ゐなければいけません。

皇室の御紋章(十六瓣菊花)に對しまつりては敬意を表しまつります。

天皇旗は明治二十二年御制定あらせられたるものであります。御旗を拜しまつる時は最敬禮を致します。

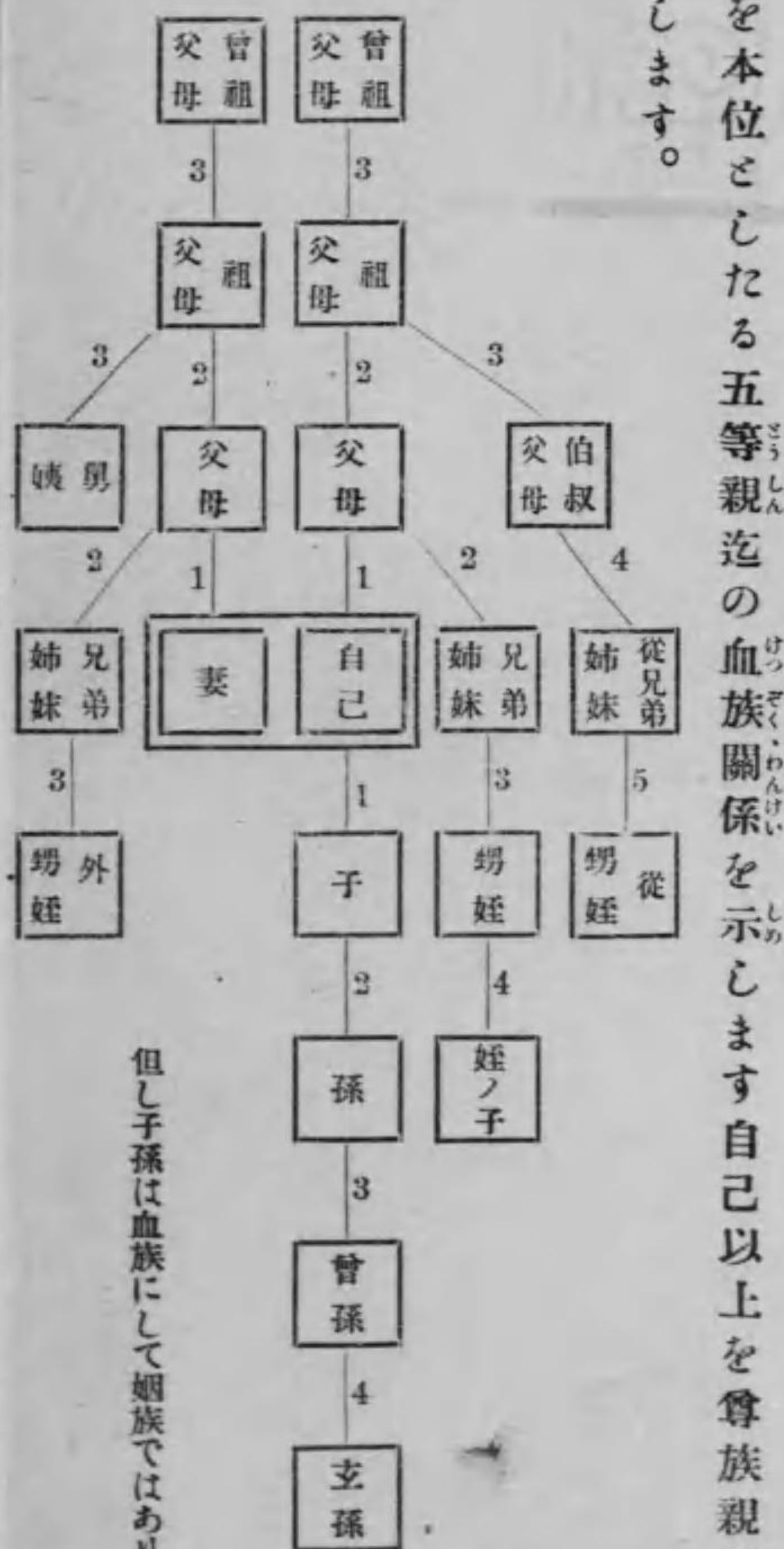
皇后旗、皇太子旗、同妃旗、親王旗、同妃旗等も同年の御定めでありまして、拜しまつる時は矢張り最敬禮を致すは申迄もありません。

大日本帝國の國旗は明治五年十一月御制定せられしものであります、日章旗と申まして世界無比の名譽ある日の丸を象徴したものであります、即ち帝國を代表する徽章でありますから國民たるものは常に尊重しなければなりません。外國旗と交叉す

る時は門外より見て帝國旗は右方外國旗は左方にします。
 御陵、神社、佛閣、祖先の墓等は最も尊敬しなければいけません、參詣する時は身を潔め服装を正して誠心誠意崇敬の意を表します。
 由來我國は祖先崇拜の優美なる國でありますから益々此精神を發揮したいものであります。

家庭

自己を本位としたる五等親迄の血族關係を示します自己以上を尊族親以下を卑族親と申します。



但し子孫は血族にして姻族ではありません。

一家の中は和氣霽々として皆が睦い事が大切の事であり、即ち年長者を尊敬し年少者を愛護するのである。朝起きては年長者は申迄もなく年少者に對してもそれ相當の挨拶をして今日の日を祝福します、食事の時も、學校に行く時も、外出する時も、途上にて知った人に逢うた時も、歸つた時もそれらの挨拶を致します。夜になれば年長者の床を延べる枕は東又は南向が宜しい北枕は多く死人の爲めに延べるものであります、寝む時は父母年長者には相當の挨拶をする事を忘れてはいけません。此挨拶は一寸考へると形式の様で何等か馬鹿々々しい様にもありますが、決してそうでありません、即ち禮の精神たる敬愛の念の發露であります、小さくは一家の圓滿、大きくは社會、國際間の平和維持の基ともなるべき重要な事でございます。

下男下女雇人又は出入商人に對しても決して侮蔑の言葉や行ひをしない様に、凡て彼等に對しては傲慢或は命令的に使ふよりも、温雅の徳を示し、愛護する方が能く働くものである、若し過ちをしても温顔を以て懇々と教へ諭した方が、妄りに叱責するよりも遙に効果を得るものであります。

子女弟妹に對しては常に愛敬し、個性を尊重して餘りに壓迫を加へない様に、又決

して虚や偽を言はせない様に、良い話や善い行をする様に、眞直に且つ自分の事は自分にする様に教育しなければいけません。

服 装

服装は人格を表すものでありますから日常注意して取り亂さない様に又質素清潔を旨として華美に流れ又野鄙ならぬ様に縞柄色合等も選ばねばなりません、又慶事には優美に、凶事には地味にしたいものであります。禮服の正式は冬は上着黒無地五つ紋付、下着白又は鼠色、肌着白袴襦袢、帯は角帯、袴を着け、羽織は黒五つ紋付にして白足袋を履きます。夏は白無地五つ紋付、下着は白無地とす、要するに容儀を正し儀式の精神を汚さざる様頭髮等にも充分の注意をなさねばなりません。

言 語

言葉の使方は其人の品位を表すものでありますから常々注意して上品に、簡單に、明瞭にあらねばなりません、又人稱と云ふのは一人稱、二人稱、三人稱の事であり、大略を申しますれば一人稱とはワタクシ、ワタクシ、自分、手前等であり、二人稱とは對者に申す事でアナタ、アナタ様、先生とか申すのであります、三人稱とは對者以外の人を申すので誰様、誰様の御父様とか申すのであります、然し家族の者には尊稱を付ないものです假令ば對者に向つて自分のお母様とか、お姉様とか申すのは反て無禮になります、之れは單に父又は母とか姉とか申さねばいけません。お祝ひの言葉は晴れやかに心から祝福する表情を致します。お悔みの時は先方の身になつて哀愁の意を表さねばなりません、私は今迄にお悔みを申す人が白齒を出してお世辭笑をなさるのを度々見受けた事があります、之は敢て悪意ではありません、せうが、衷心哀悼の念のない證據であつて其心事が見へ透されて情ない氣が致します、此事は餘程注意を要する事と思ひます。概して女の方はお話が長い様にありますが之は自己發表や、噂話や、人の身の上話が多い様であります、成るべく有益な事か趣味あるお話をして他人を評する事は慎みたい事と思ひます。又自分許り話すとか、人の話の腰を折るなども宜しくありません、人の噂話に身が入つて日の暮れるのも氣付ぬなどは餘り感心致しません。

訪問

六

人を訪問する時は名刺を持って参ります。未知の人を訪れる時は知人の紹介状を持つて行かないと非禮になります。取次の人が出でらるれば名刺を渡して「誰様に何々の用事」と云ふ事を明瞭に申します。案内されるれば其室に入つて下座の方に控へて座布団を敷いてはいけません。先方が見へて一應の挨拶をして勧められて始めて座布団を敷きます。要談がすめば長居せずに辭し去らねばいけません。正式の訪問には電話又は郵便で時日を打ち合せ時間を勵行したいものです。先方に病人ある時其他取込み中には遠慮して上らない様にしなければ反つて迷惑をかけます。出産のお祝には一週後に死去の通知があつた時は直に悔みに参ります。普通訪問時間は午前九時より十一時迄と午後二時より四時迄が宜しい。食事前は遠慮します又食事時迄も長居してはいけません。來客中又は客の歸らるゝ時など家人は高笑ひするとか隙見など決してすべきものでありません。一家の主婦たる人はかねて其注意がありたい事を望みます。履物はお客の上られた後には必ず直して置きます。何でも無い様ですが履物も揃へ

てない事は如何にも冷遇しられた様で感情を悪くするものであります。附手に申します。履物は常に履揃へる習慣をつけないといけません。家にある時でも一尺も二尺も離して飛び上るのは、着物の衿を広げると、帯を亂らに結び下げるのと同様に其人の引き締りのない粗漏の性質を見透かさるゝものでありますから常々心掛けないといけません。

食事

食卓又はお膳については静にして箸を取り多辯せぬ様に、外を見廻さない様に、口音を立てぬ様に、器物打ちつけぬ様にします。又昔から傳へられた左記の事は注意しなければいけません。

- 空箸 挟みかけて見合する事
- 探り箸 椀の中の品を撰り喰いする事
- 移り箸 吸物を食べてすぐ焼物を食べる事
- 込み箸 口中深く押し込む事
- 膳越し 向膳の品を手に取り取らず挟む事

七

受吸ひ 汁の再進を膳にかす其儘吸ふ事
 もぎ食ひ 箸についた飯粒を唇にて取る事
 ねぶり箸 鱈などの箸につきしをねぶり取る事
 大口箸 口一杯になる様口に入れざる事

賀 壽

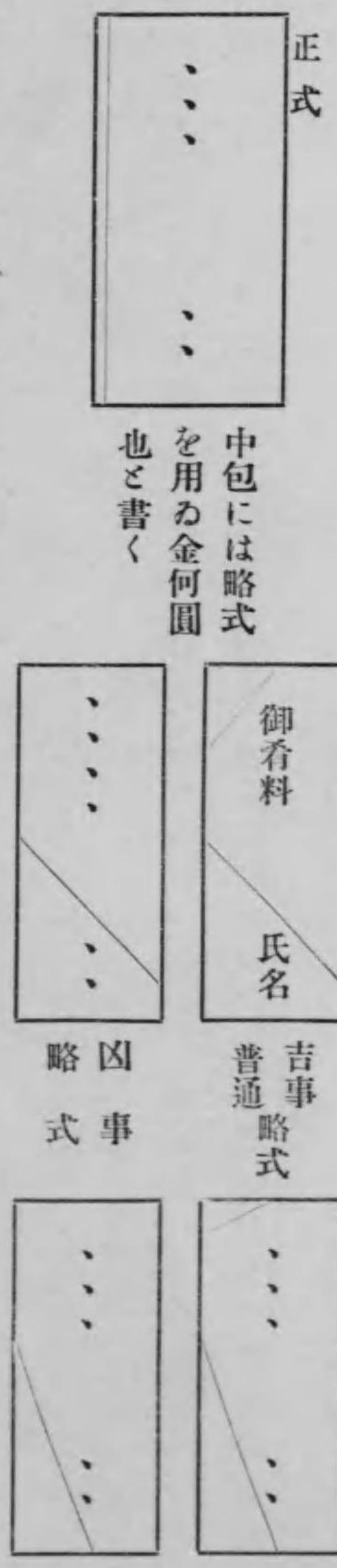
還暦の祝は六十一歳になつて祝ふのであります即ち其年の干支は生れた時の干支と同じでありますから本卦返りとも謂ひます、其日は赤の着物、赤の頭巾を冠り親類、知人を招待して賀宴を開きます。
 古稀の祝は七十歳にもなるは古から稀れである長命を祝ふのであつて、紅白の餅を親戚や知人に送ります。
 喜の字の祝は七十七歳の祝である七十七の三字は「喜」の字になる謂ひであつて親族や知人を招待し賀宴を催して紅白の餅や自分に筆を執つて扇面表にの字を書いて頒ちます。
 米字の祝は八十八歳の誕生の祝である即ち八十八は米の字になるに因みての事であ

ります矢張り親戚知己を招待して盛宴を張ります。
 銀婚式は夫婦が結婚して二十五年目に當るを祝ふのであります。
 金婚式は結婚して五十年目に當る夫婦の祝ひであります之は世間に稀れであります。男子四十二歳女子三十三歳は初老の祝ひとして親戚知己を招いて紅白の餅を搗きましてお祝ひ致處もありません。

贈 物

贈物をするには身分相應にして誠意をこめたる品を選び形式に流れてはいけません其数は普通一、三、五等の奇数とし、凶事には二、四、六等の偶数とし、婚禮の祝には一又は二個であります。左に表書の認め方を示します。
 吉事には 御年玉、御年始、御中元、御祝、壽、御清酒料、御肴料、
 凶事には 御神前、御靈前、御菓子料、御柵料、御玉串料、御神饌料、(以上神式)
 御靈前、御佛前、御香奠、御香料、御齋料、御菓子料(以上佛式)
 忌明には 忌中志、滿忌志、中陰志、滿中陰志、
 謝禮には 薄志、寸志、御禮、謝儀、

水引は吉事、普通には赤白、金銀。凶事には黒白、黄白等を用ゐ、結方は婚禮には結切りにして端を巻く老の浪と云ふ。普通には輪結にし、凶事には結切りにして兩端を下げる、凡て白又は銀を向つて左方にします。熨斗は凶事の外は凡て付けます、包紙は左圖の通り



正式の上包は吉凶共に同じ、中包は各略式を用ゐます水引及結方に依つて違ひます略式の包には水引は用ゐません。

出 産

命名は三日、五日又は七日目。宮詣は三十日又は三十三日目、初節句（男は端午五月五日、女は雛三月三日）膳据りは三歳、紐解、袴着は五歳、かきの祝は七歳であります。

服 忌

神式は初祭、十日、五十日、百日、一週年、三年、五年、十年祭、十年以下五十年迄は十年毎に祭り百年祭後は百年毎に祭る。佛式は初七日、二七日、三七日、三十五日、四十九日の法事にて忌明となり、百ヶ日、一週忌にて服を終り、三回、七回、十三回、十七回、廿五回、三十三回忌、五十年忌、百年忌以後は百年毎に法事を営む、高祖父母以下は毎年其忌日に佛事を営みます。

服 忌 令

| | | | |
|-----|-----|--------|---|
| 族 | 籍 | 父 方 | 備 考 |
| 高 祖 | 父 母 | (忌三十日) | (離別の高祖母は定式の服忌。養子實方の高祖父は互に忌服。父の實母方高祖母は一日の遠慮) |
| 曾 祖 | 父 母 | (忌二十日) | (離別の曾祖母妾なるときは一日の遠慮。養子は一日の遠慮。父の實母及祖父母は一日の遠慮) |

頭は眞直にして上體は前後左右に傾けず正しくすらすらと保ち、眼は少し伏目にして前方九尺内外の處に注ぎます、人と對座の時には先方の胸から膝の間に注ぎます、人の顔を見つめるは宜しくありません。手は左の母指を右手で軽く握り、左手の四指を上重ねて膝の上に置くか、兩手の指を揃へて少し丸みを持つて兩膝の上に正しく置くもよろし、又貴人の前には兩手の母指と食指を突き合せ膝前三寸位の疊につき上體を少し屈むるか、或は兩手の指を伸べて掌を兩股につけ指尖を疊に立つるもよろし、之は敬慎の意を表す様で日常心得をくべき事でありませぬ。足は母指を突合せるか又は少し重ね兩膝頭の離れぬ様にします。(談話の際の表情は眼にありま

一四

すから其の働きの如何に依つて先方に快、不快を與へるものでありますから心すべき事であります)。

座禮拜儀

上位の方に對しては兩手を膝前三四寸の所に母指食指を突き合せ、上體を靜かに前に屈めて兩手の中に鼻尖を入る程にして、兩肘は股と疊につけ一呼吸して元の姿勢に復します。

同位の人に對しては膝前三四寸の所に兩手の間隔を三寸位開きてつき、頭を疊の上三寸位迄に上體と共に靜に屈め軽く一呼吸の後元に復します。下位の者に對しては右手は膝の上をきしま、左手を軽く疊につき上體を少し屈むるか又は注目するのみでよろし(互に一禮して少し頭の揚げ方早かりし時は途中で待ち合せて同時に元の姿勢になる様にします、何度も揚げたり下たりするは見苦しきものであります)。

起居進退

立つ時は兩手を膝の上に並べ先づ右膝を少し引き爪立て、次に左膝を引き爪立て右膝頭を浮し左膝頭は疊につけしま、體を右方に捻りて立ち足を揃へます、此時は眼は正面に注ぎます、之を右廻りと云ひ反對にするを左廻りと云ふ又詰聞き或は小膝廻しとも謂ひます。

座るには兩手を前股にあて、左足を半ば引き左膝をつき續いて右膝をつきて左膝右膝とづり出し座りて上體を正しく据へます。

進むには兩手を揃へて膝前五六寸の所につき左膝右膝と進め、又兩手を前へ伸して

一五

左右膝と進む此時足は甲を疊に擦ります。退くには膝元近く兩手を揃へてつき右膝左膝と退き、又兩手を引き右左膝と退く此時足は爪立てます。(進むも退くも普通三手三足であります。此進退が總ての動作の基となるのですから練習を積みてすらく角立たぬ様になさいまし)。

人前を通る禮

上位の人が右側に着座ある前を通る時は一間位手前にて斜に向いて止り、右足を半ば引き右膝より疊につき兩手を前につきて一禮(御免下さいましと云ふ意)して右へ膝廻りして立ち、小腰を屈め右手にて裾を押へ下座の方即ち左足より踏み出し通り過ぎて普通に歩きます、上位の方左側に居らるゝ時は此反對にします。

兩側人仲を通る禮

上位の方が兩側に居らるゝ仲を通る時は、一間位手前にて行く方向に止り、左側に最上位の人ある時は左右膝とつき兩手を前につきて上位下位と注目して一禮して左へ小膝廻りして立ち兩手で裾を押へ、小腰を屈め下位の方即ち右足から靜に歩み通り過ぎて體を伸して歩きます。最上位の方右側に居らるゝ時は此反對にします。同位の人の前或は中を通る時は只だ禮を軽くするのみにて他は皆同じです。下位の人時は座するに及ばず只だ小腰を屈るのみでよろしい。

第三節 立禮

立禮の態度

頭を正しくして上體の重みを兩足に等しくかけすらつと立ち、眼は二間内外の所に注ぐ、人と對立する時は先方の胸より膝の邊迄に注ぎ、兩手は肩を張らず自然に垂れ、足は爪尖を合せ正しく揃へます。

立禮拜儀

高貴の方には最敬禮をします、即ち上體を靜に屈指掌を膝頭の下に達する程にし、一呼吸して靜に直立の姿勢に復します。上位の方には指尖を膝頭迄下げ軽く一呼吸して前の姿勢に復します。

同位の人には指尖を膝頭の上邊迄下げて上體を復して一呼吸する位を適度とします。下位の人には軽く上體を屈むるか又は注目するのみでよろし。敬禮をします時は必ず先方の眼に注目して上體を屈むる事を忘れてはいけません。昔は三息の禮と申して屈むる時一息、屈みて一息、伸して一息したものです。文部省發表の作法教授要項には一呼吸とあります之は前後の二息を省いたもので、其度に於ては差はありません。尙ほ古來の注目は胸又は膝の邊とありますが昔では人の顔をまともに見る事は無禮としてあつたのです、今の世とても至極高貴のお方に對しては其心してなすべき事と思ひます。

行歩進退

室内では一間半内外に眼を注ぎ、上體を眞直にして兩手は股の斜前につけ、足はすら／＼と一間を六足に歩む、敷居や畳の縁を踏まない様に注意します。前に進むには左足から踏み出します。

右方に行くには左足を右足の爪尖にかむさる様にして右足から右方に歩み出します。左方に行かんとする時は此反對にします。

退く時は右足より引き一間を六足に歩みます後に廻る時は左踵を少し開き、右足を左足の後に引きつけ、左足を右爪尖にかむさる様に出し、右足から新方向に踏み出します。左方に廻る時は此反對にします。(歩む時は爪尖を上ぐる事なく、裏を蹴り返す事なく、殊に見苦しきは足尖の開く事であります。俗に外鎌とて笑ふものです常に内八字に歩く習慣をつけないといけません。)

人前を通る禮

上位の方左側に立たれ又は椅子に掛けある前を通る時は一間半位手前にて斜に向つて止り一禮して上體を少し屈め左手にて裾を押ゆる様にして、右足から歩み出して通り過ぎて元の姿勢に復します。

同位の人に對しては今少し略にします。下位の者には一寸會釋するか、注目するのみでよろしい。

兩側人中を通る禮

上位の方兩側に立ち又は椅子に掛けある仲を通るには、一間半位手前にて正しく行

く方向に止り、上座下座と注目して眞直に一禮して上體を少し屈め下座の方の足から踏み出し通り過ぎて元の姿勢に復します。

同位の人に對しては少し禮を軽くし。下位の者に對しては尙ほ一層簡略にします。

(人前を通る事は出來得る限り避けて後を通らねばなりません、又敬禮する時頭のみガクツと下げるは見苦しく且つ無禮ですから、上體と共にする様に心得ねばなりません)。

室内行逢の禮

上位の方と行逢つた時は左方に避け右斜向きて禮をなし、行き過ぎらるゝを見送りて歩み出します。上位の人は一寸立ち止るか又は行々軽く答禮するのみでよろし。同位の人に對しては互に左方に避け向き合ひて止り一禮して同時に歩み出します。

室外行逢の禮

室外とは廊下の事をさして申す、其方法は室内と異りはありませんが狭い所ですから自分は壁に寄れるだけ片寄りて、上位の方の通り易き様にします。

道路行逢の禮

室内の行逢と異なる事はありませんがお互の距離一間半内外を適度とします。(左方に避ける時は謂ふものゝ水滴りなどある時は上位の人に良き道を譲る様になければいけません)。

洋傘及物品携帯行逢の禮

洋傘をさし上位の人に行逢ひし時は三間位手前から行々傘を閉ぢ(右手に柄を持ち左方に倒し母指でポツチリを押へ閉ぢて左手を放ち、石突を後にして右横に垂れ)一間半位手前に左側に避け左手を膝頭迄下げ上位に對するの禮をして歩み出して傘を開きます。

同位の人に對しては互に柄を右手に持ち其儘左方に倒し左手に受け同位に對する禮をします。下位に對しては僅に左方に傾くるのみでよろしい。(降雨の時は反對の方に少し傾け雨滴を人にかけてぬ様にします、殊に學校生徒の如き小さき人は先方の傘の下になるものですから必ず傾ける事を忘れてはいけません)。

風呂敷包など持つてゐる時は左方に持ち右手のみを下げて一禮します。

二二

椅子に倚る禮

多くの椅子列べある時も一ツある時も下座の方から進み椅子の後足と並びて止り、椅子に近き方の足即ち椅子の左方から掛ける時は右左足と三度に踏み揃へ、右手を椅子にかけ右足を横に開き、左足を揃へて右手を放ち、羽織をはねる事なく其儘静にかけます、上體は眞直にして眼は一問半内外の所に注ぎ、兩手は組合せるか又は膝の上に並べます。

椅子の右方よりかくる時は前と反對に左右左足と踏み揃へ左手をかけ左右足と左方に寄り左手を放ち静にかけます。

椅子を離る禮

椅子を離る時は右手を椅子にかけ、左右足と左方に開き寄り、手を放ち椅子に遠き方の足即ち左右左足と退き右足を左足の爪尖にかむさる様にして左足から下座の方へ歸ります。

下座が右方にある時は反對に左手をかけ右左足と右方に寄り、右左右足と退き左足を右爪尖にかむさる様にして右足より歸ります。

襖開閉の禮

貴人の居ます室へ入る時襖を左方へ開くには左方の襖に向ひて斜に座り、先づ左手を引手にかけて三寸程開き、其手は下げて疊につき右手を闕より三寸位上の襖の縁にあて、靜に左方へ開きて兩手を闕内に揃へてつき正面向き左右膝と進む、三度前進して全く室内に入り右手を右横につき横向き又右につき襖に斜に向ひ、右手は疊につき左手にて闕より三寸位上を持ち引きて残り三四寸は左手を疊につき右手の指尖を引手にあて押して全くしめ、兩手を左横につき横を向き、再び左方につき正面向き姿勢を正して敬禮をします、お話あらば兩手をつきて承り終らば再び敬禮します。歸る時は右側に兩手をつき横向き再び右方につき襖に斜に向ひて、右手を引手にかけて三寸程開き其手は下げて疊につき、左手を三四寸上にあて襖を開き兩手を左側につき前の如く正面に向き直つて、右左膝と後退り再び退き全く外に出て襖に斜に向ひて左手は疊につき右手にて前の様に引き寄せ左手指尖を引手にあて全く閉ち、右

二三

へ小膝廻りして立ち歸る。襖を右に開く時は總て反對にします。

二四

同略式

襖を右方に開くには其襖に向つて斜に膝つき右手を引手にかけて三寸位開き其手は膝の上を下し、左手を鬮より五六寸の所にあて二尺位開け小腰を屈めて室内に入り、斜に襖に向いて跪つき右手にて五六寸の所を持ち三寸位残る迄閉め、左手にて引手を押し全く閉め正面向きに挨拶をします。

歸る時襖を左方に開くには、襖に斜に向ひ跪き左手を引手にかけて三寸程開き右手を五六寸上方にあて開き小腰を屈めて、正面に後を向けぬ様斜に出で、右に廻りて跪き左手にて五六寸上を持ち引き閉め、右手を引手に押しあて全く閉ぢて歸ります。

障子開閉の禮

障子開くるも閉ぢるも襖に同じ只だ違ふ所は引手にかくる手を障子にありては横棧にかけて開閉するのであります。

扉開閉の禮

扉を右に開く時は扉の一尺位手前に止まり右手にて取手を持ちて前に引きて開き、左足を一步踏みこみ體を捻りて右足を後に引く時に右手を放ち、左手で内の取手を持ち閉ぢる時左足を引き揃へます。扉を左方に開く時は總て反對にします。向ふに押し開く扉は右手にて取手を持ち向ふへ押し、右足を一步踏みこみ又左足を向ふへ踏みこみ體を捻りて右手を放ち左手に持ちかへ右足を引きて揃へ全く閉ぢます。左方に押開く時は全く反對に手足を動かすのです。

簾及幕出入の禮

簾の中に入るには端の簾の下を向ふへ押し入り外に出る時は下を手前に引きて出ます。霞簾は入るも出るも外に引き又は押します。幕は紋のある所を避けて下を兩手にて頭より高く巻上げ二足、三足膝行して内に入り後に手を廻して引きをろす、出る時も亦同じ。

二五

第四節 客接待の禮

二六

取次

玄關にお客來訪の聲がした時は何事を仕てゐても直にハイと答へて、前垂、襷などはづして取次に出ます、勝手元の方を後にして斜に座して障子を開け、心易き人ならば直にお座敷又は應接室に案内します、初めての人ならば兩手をつきて姓名及來意を承りて、暫くお待ち遊ばしませ、と申して主人に告げ案内せよとあれば、どうぞお上り遊ばしませ、と申て先きに立ちて案内します、そして主人へお通しせし旨を告げをいて玄關に行き、履物を上座(勝手元に遠き方)に向ふむけて一二寸の間を置きて揃へ、外套や帽子はそれ〴〵掛る處にかけて、手を洗つて茶菓の用意をするのであります。

座布團出方及受方

座布團の出方に三通りあります第一は表を内に二ツ折にして、折目を下にし右手にて中程を持ち下げ、前上りにして左手にて前上を持ち(座敷の上座我右である時は左

方に持つ)お客の三尺程手前に座り、折目を手前にして置き兩手にて左右の角を持ちて上を手前に返し、少し押し進めて兩手をつき一禮して右又は左に廻りて退きます。第二は折目を手前にして兩手を仰向け乳の高さに持ち出で前の様に出します。第三は革布團又は綿多きもの或は新しく二ツ折りにしられない物は、表を上を兩手に載せ乳の高さに持ち出でお客の前に靜に置き少し押し進めて一禮して退きます。

受くるには軽く答禮して右左膝を少し引き爪立ち膝を浮せ、兩手にて引寄せ兩膝を下し前に兩手をつき左右と膝を進め座布團の前端の見へぬ位に座ります。

座布團敷きある時は前に止り座布團の上に兩膝を下し兩手を横につき體をキリ、と廻して座る、又横よりする時は下座の方から進み片膝を布團にのせ兩手をつきて兩膝をも乗せ座ります。

火鉢出方及受方

灰を掻きならしめて七分通りおこつた火を立て合せて入れ、灰ならしにて綺麗にならして椽を拭き兩手にて下を抱へて出で、お客の右膝斜前にをき兩手を仰向け少し進

二七

め右左膝を退き一禮して上座に廻りて退きます。
 受くるには先方の禮せし時に軽く答禮します下婢などの運びし時は答禮しないでも宜しいけれども婦人方は成べくせらるゝ方よろし。
 火箸は角火鉢の時はお客の右手前の角に立てかけ、丸火鉢にはお客の右手前に揃へて立てるのであります。
 唐金火鉢又は鼎の様な三本足のものは、お客の方に一本足を向けます、火箸はお客の右に頭のなる様に足の間に入れるのです。

糞盆出方及受方

灰を掻き切炭の火を立て入れ灰ならしにて綺麗にならし、灰吹はよく掃除して少し水を入れます、扱てお客に出すには箱の線穴は左右になし灰吹を我左手前（お客の右向ふ）にして持ち出でお客の右膝の前斜に置き少し進めて退きます。（火鉢、糞盆は毎朝掃除して灰を掻きならし何時にても火を入れられる様にして置く事は主婦たる人の心掛けなければならぬ事であります）
 受方は火鉢と同じ事であります。

お茶出方及受方

お茶碗、茶托などは拭きあげて、お茶を半分程注ぎ茶托を左掌にのせ右手にて縁を持ち臑の高さ位に持ち出で三尺位手前に座し前に置き兩手にて縁を持ち正面に進め右左膝と退き一禮して上座に向い小膝廻りして退る。
 受くるには軽く答禮して右手にて茶托の縁を持ち左手を添へ右膝の前に置き兩手にて茶碗を取り左掌にのせ右手を下に重ねて頂き右手を添へて呑み茶碗にのせます。
 （呑み終りて茶托に伏せるは銀、錫などの器を傷付け又は汚します、尤も煎茶の手前を出された時は伏せるがよろしい、それは煎茶の禮になつてゐるからです、然し普通の時は伏せぬがよろしい）。

菓子出方及受方

菓子器はお盆にのせ箸はお客の方へつけ兩手にて下より持ち出で手前に置き、右手にて蓋を取り左手を添へ盆の上に仰向けてをくか又は菓子器の縁に伏せかけてもよろし、盆の縁を兩手に持ち正面に參らせ兩手にて少し進め一禮して退る。

受くるには懐紙を出して膝側に置き右手に箸を上より採り左手にて下より中程を持ち、右手を下にすまして持ちかへ左手に紙を持ち菓子をはさみ紙にうけ箸を置いて菓子は紙と共に前に置き左手にとりて食べる、大きいものは両手にて割り右の方を紙に置き左の方を食べ右手にて口を掩ひます。尚又一人々々に菓子を出す場合には白紙を斜に二ツ折にしてお客の方に折目をむけて敷き菓子を盛りお客の左前に進めて、茶碗などある時は少し右に片寄せて菓子を置きます。受くるには紙のまゝ頂き下にをき前の様に食べる、残りのある時は敷紙に包みて持ち歸ります。

團扇出方及受方

晝は表夜は裏の先方に向く様にして右手にて柄の中程を持ち、左手の中指尖に立て持ち出で其儘渡します。又柄を向ふにし右手の母指と食指中指とで持ち紅指小指を地紙にあて左手は疊につき右手のみで參らするもよろし。受くるには柄の上部を右手にてとり左掌を團扇の裏にあて軽く頂きます。

扇子出方及受方

扇子の要を母指手前に中指食指を向ふに他の二指は屈めて左手中指尖に立て持ち出で其儘渡します。受くるには要より一二寸上部を右手にてとり大骨を平にして左掌にて地紙の所を受け軽く頂きます。

手紙の渡方及受方

字頭を向ふにして左掌にのせ母指にておさへ右手にて右手前を持ち出で前に座し、右掌にのせ左手にて切手の所を持ちて廻して字頭を我方となし、右掌にのせ左手前を左手にて持ちて渡します。又左手は疊につき右手のみにて渡してもよろし、何れにしても一禮して上座に向ひて静に立ち歸るのであります。受くるには右手を前に左手を手前にして受取ります。(手紙に切手を貼るは正しく左上に貼るべきであります勝手な所に貼ては消印をするに分秒をあらそう局に於ては大變迷惑します心得ふべき事であります)。

白紙出方及受方

白紙は折目を我右にして左掌にのせ右手にて紙の右手前を持ち出で前に座して、右手にて折目の向ふ角を持ちて手前に廻し更に繰返して兩手にて渡す。受くるには兩手を並べ又は右手向ふ左手を手前にして受けます。

塵紙出方及出方

塵紙は縦四ツ折にして右手に下げて前上りに持ち出で前にて左手にて一寸取直し右手にてお客の右膝の傍に置く、此時左手は疊につけます。受くるには軽く答禮するのみにて宜し。

料紙硯箱出方及受方

硯箱は最初蓋を取りて中を調べ足らぬ物ある時は入れます、扱て料紙は折目を我右にして其下に（改名其他書いて頂く時は硯箱の上に）硯の海を向ふにして重ね、兩手の四指共に下にして母指は箱の横にあて乳の高き位に持ち出で座りて其儘疊に置

き、紙を残して硯箱を右方に並べ其手にて直に蓋を取り硯箱の右方に並べ、水を注ぎ墨はのの字形に靜に摺り、右手に筆を取り穂先を卸し墨を含ませ筆架又は箱の縁にかけをきて、紙を左掌にのせ白紙出方と同様に出し、硯箱は疊にをきし儘取直して紙の左方（我より見て）に並べ蓋も取直して箱の左方に並べ一禮して退く（蓋は繪又は文字なきものは取直すに及びません）。受方は軽く答禮するのみにてよろし。

尺八出方及受方

尺八は唇を當てる所を歌口と申します此方が頭です、歌口を右上にして右手にて中程を持ち穴を上に向けて斜に左中指に立て持ち出で左手をすり上げ右手を擦下げる時に頭を外に廻し取かへて兩手にて渡します。受くるには左手は中程を上より取り右手は頭の方を下より受け軽くいただく。

横笛出方及受方

唇を當てる大きな穴のある方を頭とします、頭の方を左斜にして持ち出で右手をす

り上げ左手をすり下げ穴を上にして渡す、要するに尺八と反對の作法であります。受方は右手にて中程を上より取り頭の方を左手にて下より受け軽く頂きます。

書冊、新聞紙出方及受方

書冊、新聞紙は字頭を向ふにして（綴目を我右方）両手にて持ち出で白紙の出方と同様にして出します。受方も亦同じ。

卒業證書受方

證書を受くるには一間程手前にて止り一禮して左足より三步進み證書を両手にて受け自分の姓名を讀みて押戴き三步退きて一禮して歸ります。

小刀出方及受方

小刀は刃を我方に向けて右手にて柄の中程より少し下部を持ち右斜に倒して左手中指に立て持ち出で左手は疊につき右手のみにて差出します。

受方は右手にて柄を上より取り左手は下より軽く受けて一寸戴きます。

手水出方及受方

醫師の診察のすんだ後に手水を出す時は手水鉢を綺麗に洗つて水又は温湯を入れ、新しき手拭を二ツ折にして左前肢にかけ兩手にて持ち出ですゝめます、手を洗はれたならば手拭を四ツ折にして渡し、すみし時は前の様に持ち歸ります。又最初手水鉢を出し二度目に石鹼と手拭をお盆にのせて出します。受方は一寸會釋するのみにてよろし。

刀、サーベル出方及受入

刀及サーベルは刃の方を我方に向け右手にて服紗をかけ銷さしの中程を立て持ち出で、左方に倒し左手にて受け敬やうやくしく渡す。又右手に持ちし儘左手を疊につきて捧ぐるもよろし。

受方は右手は上より左手は下より受け頂きます。（刀は昔から武士の魂としてあるものですから他の品物よりも鄭重に取扱はねばなりません）。

手袋出方及受方

手袋は腹合せに右の方を上重ね、指の方を向ふにして左掌にのせ右手を添へて持ち出で取直して手首の方をお客に向けて渡します。受方は左手にのせ右手をそへます。

碁、將碁盤出方

石入又は駒入を盤の上ののせ左右より二人にて持ち出で白石を上位の方に置いて退く。石入は別にお盆にのせて出すもよろし。

ステッキ出方及受方

石突の方を右にして右手にて中程を上より持ち左手は下より受けて少し左上りに持ち出るお客の前に跪き、右手を取りかへて下より持ち頭の曲りたる方を上にして渡します。受くるには右手は上より左手は下より受ける。

傘類出方及受方

ステッキと同じ様に柄を左にして持ち出し渡すも、受くるも亦同じです。

帽子出方及受方

帽子はリボンの結目を我左にして両手とも四指を内に入れ母指を縁えんの下部にあて高く捧げて渡します。受くるには帽子の縁を両手にて受けます。

提灯出方及受方

柄の中程を左手に持ち提げ渡す時は柄元を右手に柄先を左手に掌を上にかします。受方は左手は上より右手は下より受くる。

卓上へ物品出方

卓上へ物を運ぶには總て客の左側から出します、けれども一人の時は正面から出し

ます。

お茶を出すには左手に茶托を持ち右手は軽く手前を持ちそへてお客様の左方に進み一度卓上にをき、前の様に持ちて前に出すか又は右手のみにて茶托を持ちて出すもよろし。

コーヒーは取手を我右に、匙の柄を左にし角砂糖を二ツ載せて受皿に茶碗の向ふに置き両手にて持ち出で正面より其儘進めます、お客様の横より出す時は反對にする即ち取手を我左に匙の柄を右にしてお茶と同様に出します。

ビールやサイダーを出すにはお盆にコップと栓拔、瓶をのせてお盆を左手で持ち右手は瓶の倒れぬ様に持ちそへて、一度卓上に置きコップを參らせてお盆の上にて栓を抜き泡立ちて溢れぬ様靜に注ぎます、瓶の持方は客の左側から注ぐには右手にて上部左手に下部を持つ、右側から注ぐ時は此反對にします。

菓子や折の物を出すにはお盆にのせ箸を添へ持ち出しお盆は殘して卓上に進めます。書冊などは出し方に於ては別に變りはありませんが、お手渡しなくとも卓の上に進むればよろしいのであります。

洋食の出方及食方

洋食について委しく申せば長々しくなりますが簡単に述べませう、先卓子に白布を覆いお客様の數程魚肉用と獸肉用と二本のナイフをお客の右前に、フォークを左前にスプンは大小二本を正面に置きます、出し方は献立に依て違ひもありますが、普通は最初スプ、パン、飲料、肉皿、菓子、果實(ナイフを別にそへる)最後に湯又は水の順序で出します、調味品は三四種夫れれ器物に入れて最初卓上に揃へ置く事をお忘れないう様に。

食方は出る物くを片端から食べます、餘り隙取るど他の人が迷惑しますからぐすぐすしない様に、舌鼓打たぬ様に、ナイフと皿とをガチャ／＼音させぬ様に、靜にして話などしつゝ食べます。

スプンは左手に皿の前を摘み軽く持ち少し向ふに傾けて大スプンで手前から向ふに掬ふて口に運び匙の先手前から吸ひます終つたならば匙は皿に伏せて少し皿を右側に片寄せます。

パンはナイフで切つてはいけません、之は指で摘み割つて左手に一口に入る丈け持

ちバタを塗付けて食べます。

四〇

肉類は右手にナイフ、左手にフォークを持ち一口に入る位に切つてフォークを伏せて突きさし汁を切つて口に運びます、パンなど食べる時はナイフとフォークを皿の上、右左に並べ置きます、之れを交叉すると食べ終つた事になるから給仕から引かれても仕方ありません、終つた時は組合せ皿に置きます。
ライスカレーは大スプーンで手前から向ふに掬うて食べます。
菓子は左手に取りて食べ、果實は果實用のナイフで皮を採き切りて左手に取りて食べる。

最後に出る湯又は水は指を洗ふのであります之れで口を嗽いだり又は呑んでは笑はれます心しなければいけません。

第五節 膳部の進撤

千鳥掛膳

座敷狭くして兩側にお客の着座ある時にお膳を据るのであります。給仕人は一列に

並びて膳を高く持ち出で先頭の者が右方の上座に据ゆれば二番は左方の上座に、三番は右方の次客にと云ふ様に右左交るゝに据へます、正面から出すと後がつかへるから斜に座りて据へます、退く時は最後の者が今度は先頭になりて左右から寄つて一列となつて歸ります。

一 行列膳

座敷の片側にのみお客の着座ある時は給仕人は一列に並びてお客の正面より据へて同時に立ち又一列になつて退く。

二 行列膳

座敷廣くして兩側にお客の着座ある場合には給仕人は二列に並びて出で左右に別れお客の正面からお膳を据へる、退く時は前の様に二列になつて初め後の者が先頭になつて歸る。

上座歸膳

廣き座敷の上座及兩側にお客の着座ある時は始め上座の客數だけの給仕人二列に並

びて進み順々に右左に別れてお膳を据へ（四人の時は先頭二人は正面の二人の客に次の二人は右左に別れて次の客に）歸りには正面に出した者が先頭になつて順次に一列になりて退く、之れと同時に他の給仕人は二列をなして進み（最初の給仕人は其中を通りて歸る）左右に別れてお客に据へる歸りは二列にて退きます。

本膳出方及食方

本膳の持ち方は左掌にて膳の下の中程を支へ右手は右手前の足に小指と紅指とをかけ中指と食指は膳の縁にかけ母指は上よりおさへて臆の高さに持ち膳の下より疊を見る様にします、客の正面に進みて手前にをき兩手にて膳の縁を持ち膝前四寸位の所に据へ、兩手を仰向け指先にて兩足の下部を一寸許り押し進むるのであります。二の膳は引き落とし膳とも謂ひます、お客の右方本膳と並べて据へるのです、持ち方は本膳と同様であります。

三の膳は向ふ付けとも申しまして本膳の向ふに付けるものです、持ち方は本膳と同じです、小さき膳の時は兩縁を持ちます。

此場合三ツ組盃を出すには御飯を一二度かへて後右手に銚子左手に盃臺を持ち上座

より進めます。湯を注ぐには湯桶を次ぎの室にをき飯椀を兩手にて受け退いて湯を注ぎて進めます、又は湯桶を盆にのせお客の前に座り湯桶を盆の横にをき盆にて飯椀を受け進むるもよろし。

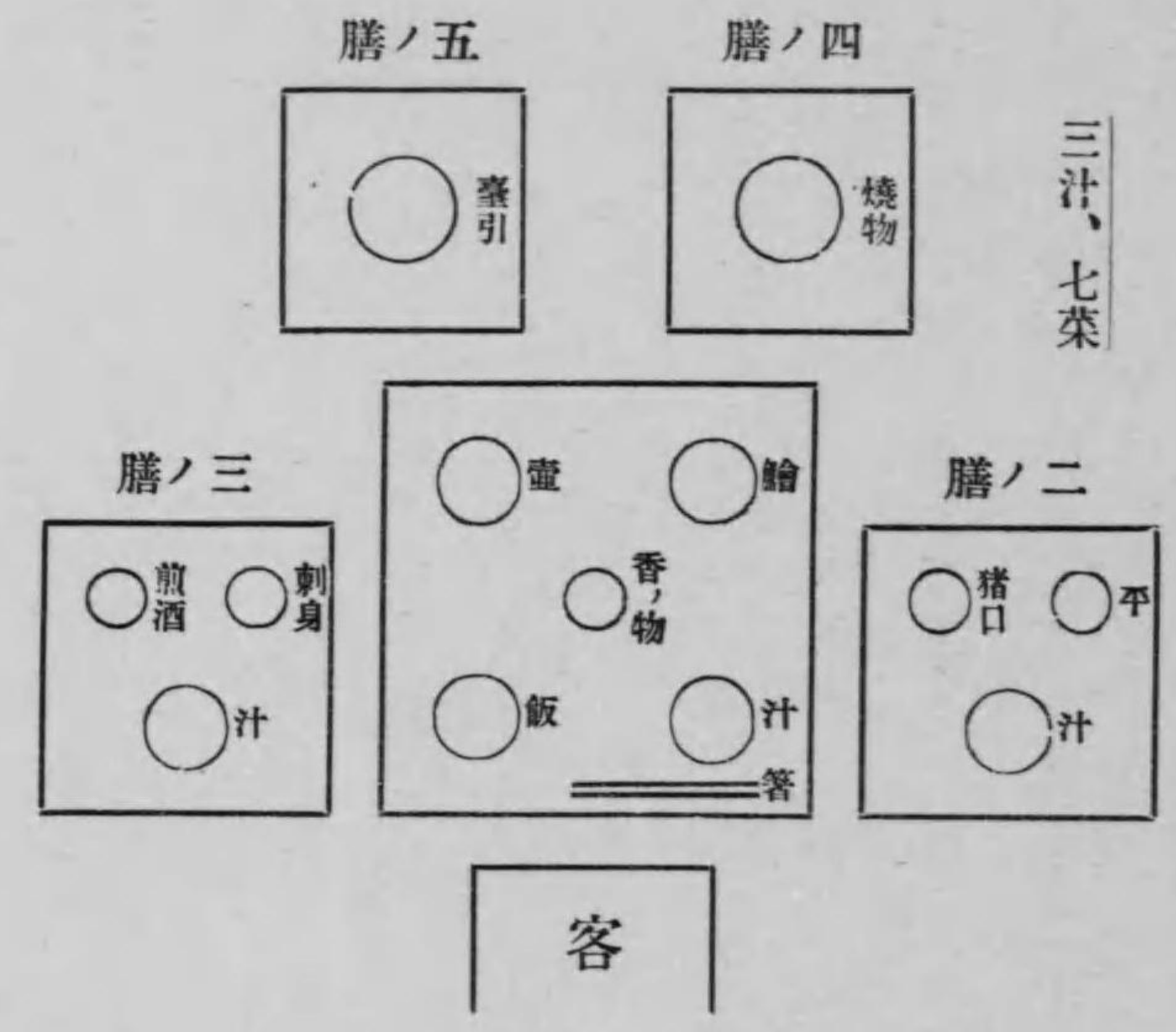
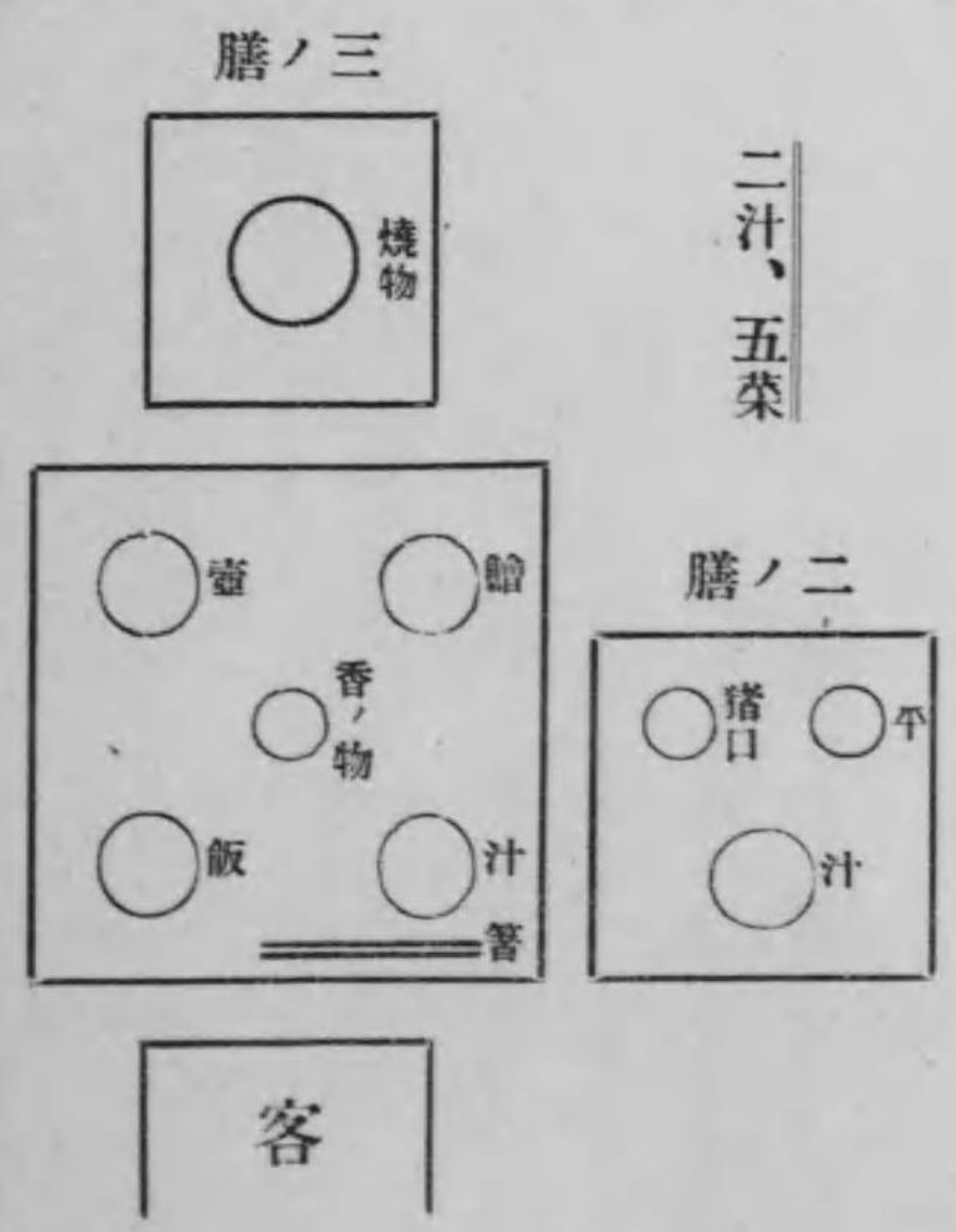
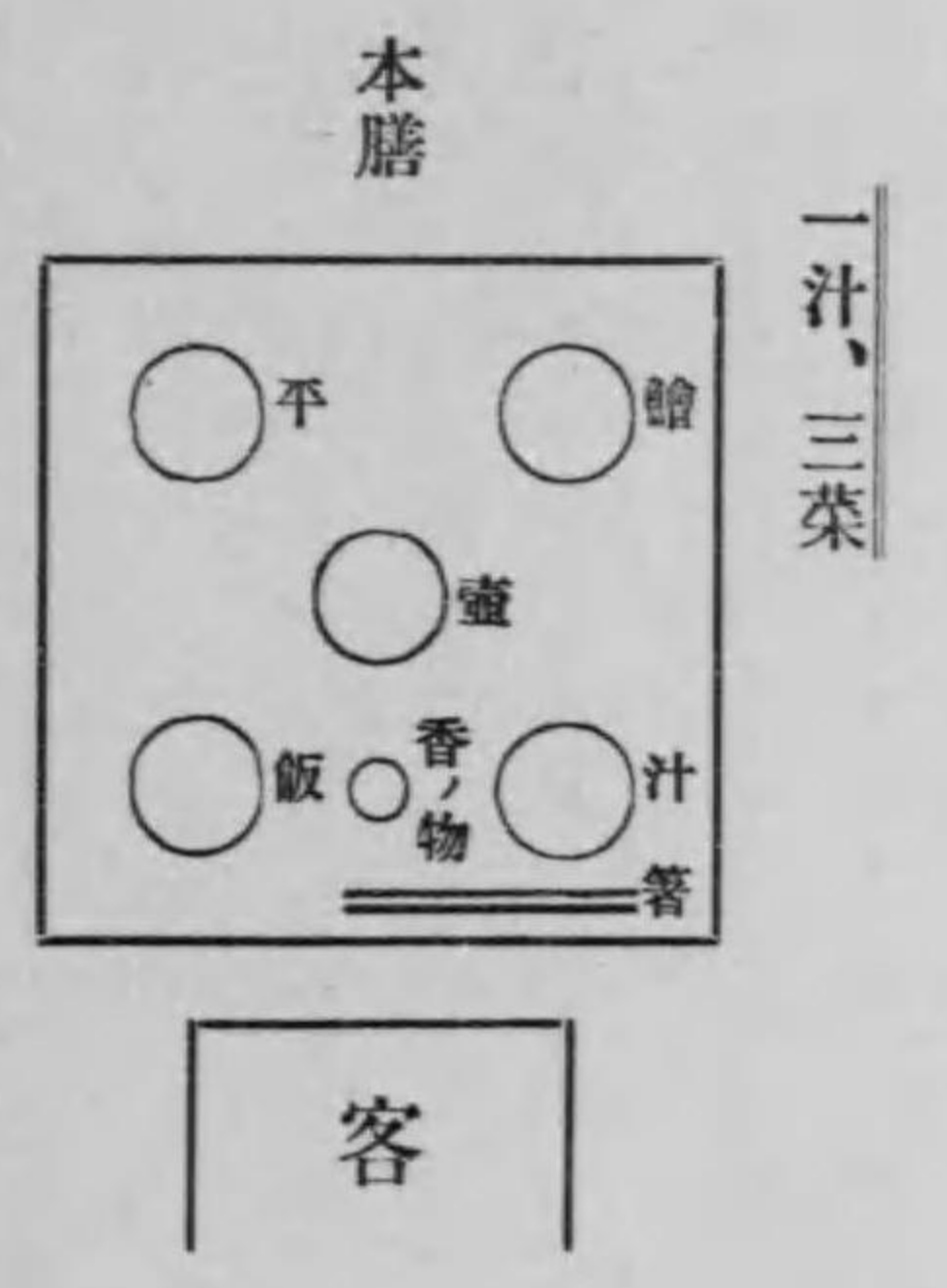
引く時は三の膳次ぎは二の膳其次ぎは本膳と云ふ順序にします。

食方は最所蓋を取ります其順序は飯、汁、木壺、平とそれ／＼右の方は膳の右下又は横に左の方は左下又は横に木壺は右側に並べてをきます。飯椀を兩手に取り左掌にのせ右手にて箸を上から取り左手の小指紅指の間に挟み右手を取直して二口食べ箸ををき飯椀を置き、汁椀を兩手に取り左掌にのせ右手を横に添へて汁を吸ひ、箸を前と同一に取りて身を食べ箸を置き椀を置く、又前同様に飯椀を取り三口食べ箸と椀を置き、汁椀を取り箸を取りて今度は身を食べ箸を置きて汁を吸ひ椀を置く、又前の如く飯二口食べ箸の汁を切つて食べる、又飯二口食べて木壺の身を食べる、五度目の飯を二口食べて平の身を食べる（食べ平でない時は外のもの）之れで一順序ります此後は好きなものを矢張前の様にして食べます、

飯と汁とはかへてよろしい、湯の前に三ツ組盃又は引盃が出ます（引盃は膳に初めからのせてあります）冷酒を兩手にて受け三口位に飲みます、そして上位の人から

順々に飯碗にお湯を戴きます、蓋は反對に平、木壺、汁、飯碗の順序に右側の分は右手に取り左手の指尖を一寸あて、左側の分は左手に取り右指をあて、とします、蓋を取る時も右の様に両手で取るのではありません、老年の人は右手又は扇子にて口を掩ふて一寸使つてもよろしい。

配膳の位置圖解



配膳の順序

お客様が一同着席されますれば（婚禮の時は仲人が下座に出まして皆さんを御紹介致しますそして熨斗を中程に出し皆同時に一禮します（之は一人々々に出すのを簡略にしたのです）次ぎにはお茶菓子を出して喫茶がすめば引きます、其次は本膳二の膳、三の膳を出しまして中で冷酒を三ツ組盃或は引盃で進め最後にお湯を差上げます。それから一同暫く休憩して羽織や袴を脱ぎます、一同着席されて會席膳を出します。

第六節 雑の部

四六

羽織及袴の着け方

廣蓋に羽織をのせ其上に袴を重ねて持ち出し右側に置き一禮して袴を取り出し前に置き紐をほごき廣げて前腰をお密に渡す（受くるには兩手にて取り左足右足と踏み入れる）後に廻りて紐を帶の結目を上に×形にしめ渡す（紐を横にて行違はせ後に廻す）紐を受取りて後にて結ぶ、今度は後腰を取りて腰板を帶の結目の上にあて紐を渡し前に廻りて十字形に結ぶ、終りて袴のひだをよく正します。

羽織は袖口に兩手共小指をかけ、肩廻りを母指と食指にて持ち乳の所を中指にて挟み持ち客の後に廻りて左の方より着せる（受くる方は右手にて乳を取り左手を通す）次に右手も同様にして通す）前に廻りて紐をかけ或は渡し一禮して廣蓋を持ちて退ります。

洋服の着せ方

廣蓋にワイシャツを上にしてネクタイ、ズボン、チョッキ、コートの順にのせ前の様に持ち出して上からくど順次に渡し手助けして着せます。

饅頭の食べ方

箸にて挟み左手に取り右手を添へて二ツに割り饅頭の落ちぬ様に二三度合せては開き開きては合せて右の方を懐紙を敷きて置き左手にある方を食べる、大きければ又割りて一口に食べられる様にする、此作法は總ての菓子類にも適用します。二ツに別けられぬ時は左手に持ちて一口切りて次いで左方の角を少し喰ひ切る、要するに三日月形にならぬ様に食べるのであります。

串の物食べ方

串にさしたるものは串を左手に持ち右手に箸を持ちて一ツく皿の中に抜きて左手

四七

に皿を持ちて箸で食べます。

玉串の捧げ方

左右の人に會釋あしやくして立ち靈前に進み司祭者に一禮して靈前數歩手前に止りて敬禮をなし玉串を採り三步前進して、手を上に、手を下に持ち頭上に捧げ敬禮して棚たなに載せ三步退き三度敬禮して其儘退歩して最初止りし所にて、司祭者に一禮して席に歸る、(略すれば玉串を捧げ三步退り敬禮して廻れ右して席に歸る)。

焼香の仕方

前の如く靈前に進み導師だうしに一禮して焼香臺の手前に座し敬禮して懷中より香包を出し左掌にのせ右手の母指食指中指にて焼香を摘み戴きて香爐に入れる、之を三度繰返して珠數を兩手にかけて合掌して法名を讀みて敬禮をして退き導師に一禮して席に歸ります。

又一般の會葬者の仕方は會葬者の爲めに備付の焼香臺の前に座り香を摘み戴きて香

爐に入れ(一度又は三度)靈に向つて合掌し敬禮をなして席に歸ります。

第七節 婚禮

仲介人

仲人は普通婿方むこがたのみでありますが家々に依りては嫁方にも立てる事があります、何れにしても夫婦共に任務があります。婚約に對する仲人は總ての點に於て眞面目まじめであらねばなりません、仲人の口一ツでとんだ錯誤を來す事もありますから慎重なる責任觀念くわんねんを持たなければいけません。

見合

仲人の計ひに依つて相方共に承諾しやうたくを得ますれば今度は見合となります、此方法は土地により又は家庭に依り或は場合に依りて一定しませぬから略します、が要するに單に顔を見合するのみではいけません、少くとも一時間位は同席して食餌を共にし談話を交へ相互に其動作や言語に注意を拂ひ觀察くわんさつしなければいけません、出來得る

ならば一ヶ月でも半年でも文通又は交際をするがよろしい、然し人の初對面に於ける一瞬間しゆんかんに浮かんだ感想かんさうは餘り違ふものではありません、時を經、日を重ぬる間には自身の心の持ち様に依つて良くも見へ悪しくも見へるもので反つて真相しんさうを知りかねる様になるものであります。

鯨尺取替し

婚約こんやくが進んで来て結納を贈る前に相方の衣服の着尺が必要になつてきます時に、身長其他肩巾等を認めて相方取りかわすのです。

結納

相方の話が調ひますれば其かためとして祝ひの品を相方から遣すのです、然し土地の風習又は家々の定め等もありまして一定されるものでありませんが、茲には古來からの形式を一ツ二ツ認めめます。

結納目録の書式

| | | | | | | | |
|------|-----|-----|----|-----|-----|-------|----|
| 御小そで | 御おび | 末ひろ | たひ | するめ | こんぶ | やなぎたる | 以上 |
| 一重 | 一筋 | 一對 | 一臺 | 一連 | 一杷 | 一樽 | |

| | | | | | | | |
|------|----|----|----|-----|----|-------|----|
| 御羽織地 | 御袴 | 末廣 | 鯛 | 共白髮 | 昆布 | 家内喜多留 | 以上 |
| 一匹 | 一腰 | 一對 | 一臺 | 一束 | 一杷 | 一樽 | |

| | | | | | | | |
|------|-----|-----|----|-----|-----|-------|----|
| 御小そで | 御おび | 末ひろ | たひ | するめ | こんぶ | やなぎたる | 以上 |
| 一重 | 一筋 | 一對 | 一臺 | 一連 | 一杷 | 一樽 | |

二ツ折りに重ねて
三ツ折りにして
上包みは圖の通り

目録

婿より嫁へ

嫁より婿へ

結納目録は一ツ何々と書きません、一ツ書きは覺書おぼへにするものであります。

目録の事

五四

古は貴人より下輩へは縦目録とし、下輩より貴人へは横目録を用ひられたものである、之によりて正式は横、略式は縦目録を用ひます。

結納使者の口上

名(婿の父)から宜敷申上ます、今日は吉日につき言入の御祝として、名(婿)より御息女様へ目録の通り進上致します、どうぞ御受納下さいます様に、と述べます。

結納受方舅の口上

今日の吉日にあたつて娘へ言ひ入の御祝儀下され、又私共に迄御鄭重なる御進物下さいまして洵に喜ばしく祝ひ納めます、どうぞ婿殿へ宜敷御傳へ下さいます様に今日は別に何にもありませんが一献差上げたいと思ひます、どうぞ御ゆつくりと召し上りませ、と述べて酒肴を饗してお歸へしします。

里出の盃

愈々婚禮の日が近まりますと前日又は當日に二三の親しき友達を招きまして、両親を上座に一同着席して本膳を出します、両親は娘に將來の心得を懇々と言ひ聞かせ昔は守刀を授けますそして別れの盃を致ます。

- 一の盃 父—娘—母
 - 二の盃 母—娘—父
 - 三の盃 娘—父—母
- (父母娘の順に昆布鯛を挟みます)

當日の仲人

仲人夫妻は朝から出で先づ嫁方へ行き何かと打ち合せをして、妻を残して夫は婿方へ行きて支度の指圖を致します、取り込みの時は手落ちのある事故、仲人は萬事に氣を配りて完全に準備を調へなければなりません。妻は嫁方にありて之れ亦た萬端の支度到手にない様に注意して、出立の時刻になれば先導役となつて同道します。嫁は頼みにするは此仲人の妻であるから其心を掬みて親切にいたわらなければなりません。

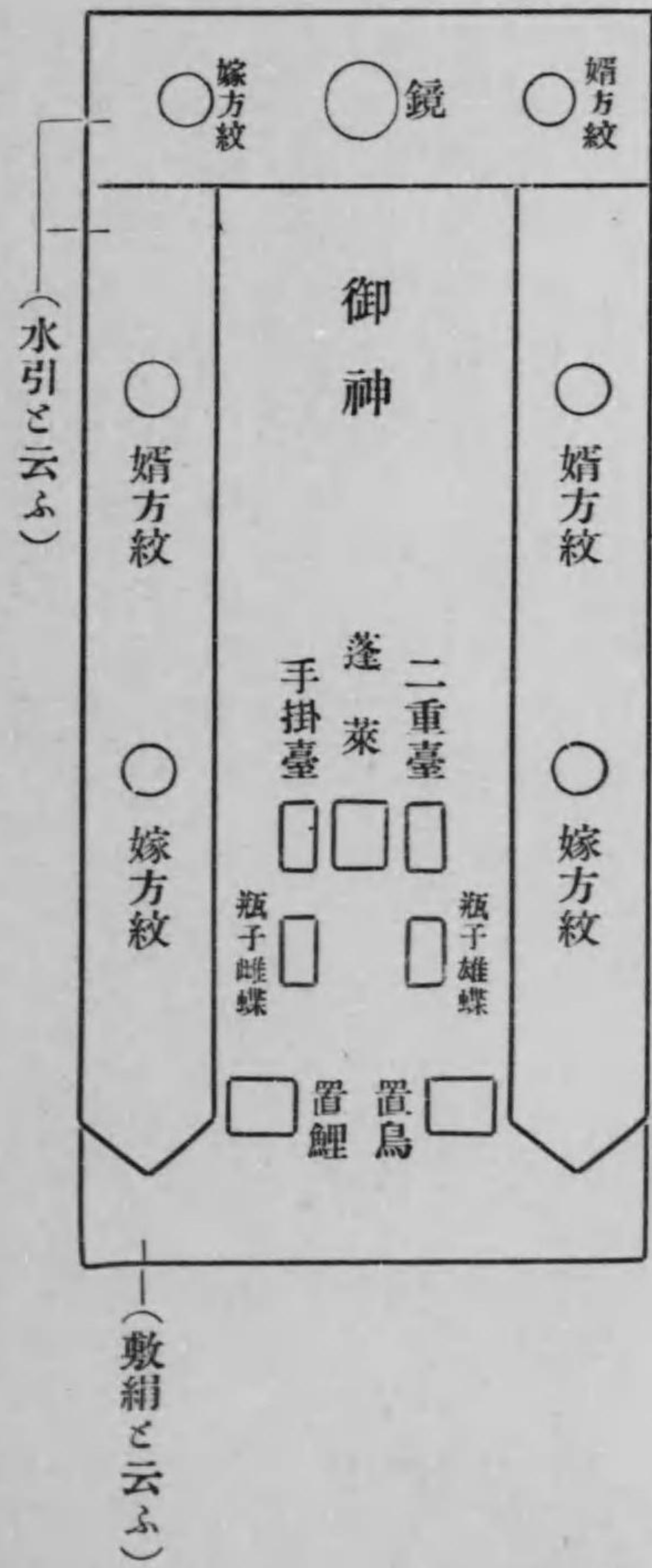
五五

嫁入の行列

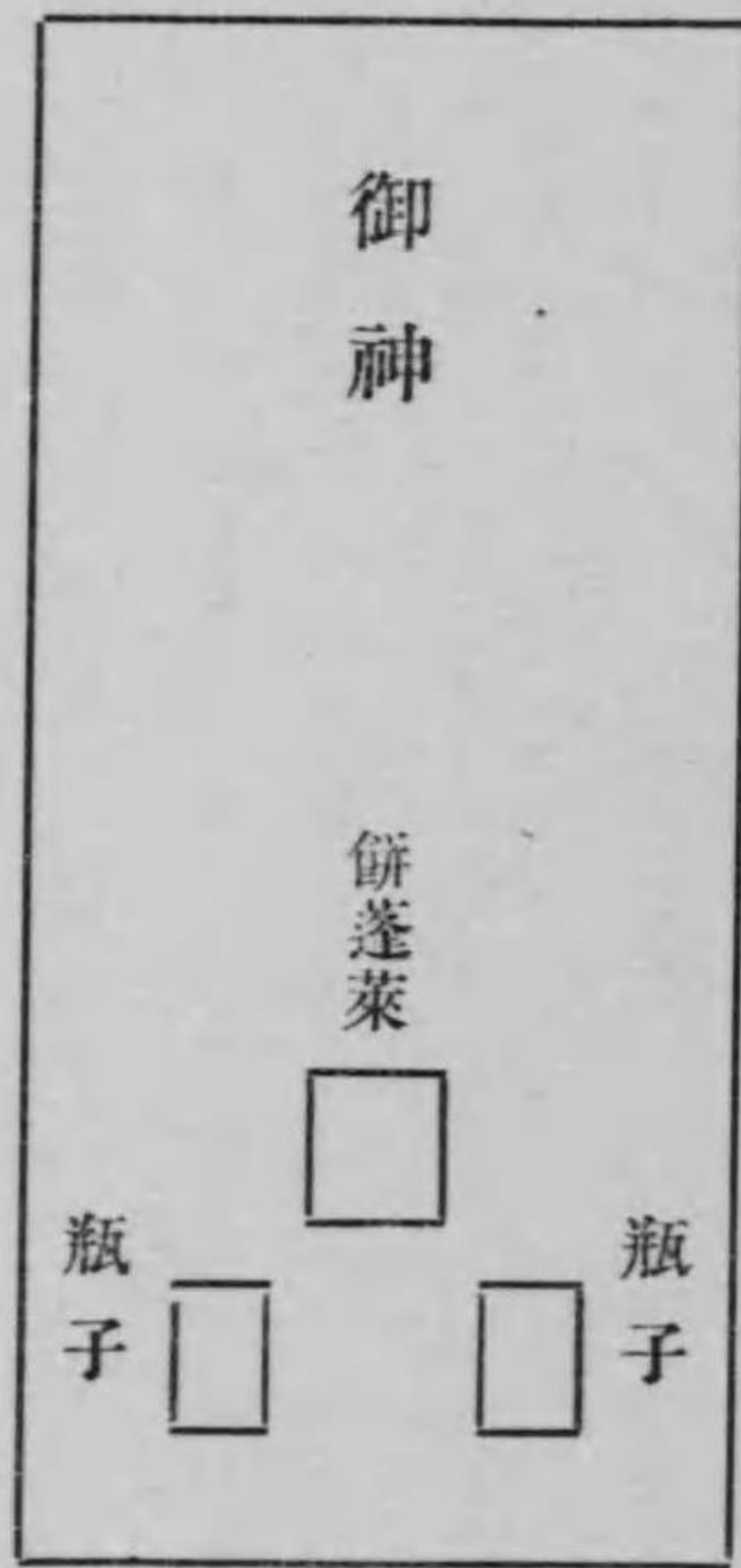
當今は俵や自動車で行列としてはありませんが門を這入つて玄關迄の順序は一番仲人の妻、二番花嫁、三番母親、四番父親、五番近親者順々につづきます。

正式場の床飾

水引は白絹に金銀の糸にて定紋を縫付け、敷絹は白絹巾五寸を九つ續ぎ合せます。



略式場の床飾



餅蓬菜には松竹梅の造花にて飾る

出迎へ

嫁方の來着が知れると直に門前と玄關に近親の者が出迎へを致します仲人の男は案内をして定め^{ひかへしつ}の控室に一同を御案内して茶菓など進めます、花嫁は衣服を改めます。

零式婚禮式

仲人の妻又は付添人は嫁の手を取つて定め^まの席につきます(座布團の手前)婚は仲人又は付添人と共に座布團の上に着席します、時に嫁は黙禮して座布團につきます

さて給仕人はお製斗を出し〔別に詳説〕本膳を運びます、付添人は嫁の爲めに箸を取つて雑煮餅を挟み切りて渡します、酌人は一人にて右手に銚子、左手は三ツ組盃の三寶〔穴のなき處を向ふに〕の穴に入れ高く捧げて持ち出で、神前に進み銚子を置き右手を三寶の穴に少しかけ左手を抜きて兩手にて胴を持ち少し上げて四五寸進め兩掌を仰向け少し押し、銚子を並べて右左膝と退き一禮して左右膝と進み、右手を右穴にかけ左手を穴に入れて右手に銚子を持ち右廻り〔三寶の進撤及び右廻りは以下凡て同じ〕して、先づ婿の前に進み前の如く銚子三寶を置き、三寶を進める婿は三寶の縁を兩手に取り軽く頂き下に置き一の盃を兩手に取る、酌人はチョツ／＼と三度に注ぎます〔此時一番の謠曲〕お謠が終つて三口に飲み滴めずに三寶に返す、酌人は前の如く持ちて嫁の前に座り銚子を置き三寶を進めて銚子を取る、付添人は三寶を頂き上の盃を兩手に取り左掌にのせ、右手を左手に添へて嫁に渡す、嫁は兩手に取り頂き酒を受け三口に飲み〔飲み盡されぬ時は其儘〕盃を付添人に渡す、付添人は三寶に返す。酌人は其間に酒を加へに立つ、加酌人は銚子を持つて進み酌人と向合つて座る、酌人は銚子の口を床の方に向け置き右手にて蓋の臍を取り左手を蓋に添へて仰向けに置く、加酌人は銚子を取つて三度に注ぐ、終つて蓋を

なし銚子を取つて兩人同時に立ち蝶を合せる様にして双方右に廻つて上下に別れ、酌人は嫁の前に行き銚子を置いて盃全部を兩手に取り左掌にのせ右手に上の盃を取り三寶に置き其上に二つ盃を重ねる之を組み替へと云ふ〔以下同じ〕そして二の盃を嫁に進め酒を注ぐ〔此時二番の謠曲〕此間に加酒人は用意の鯨尾布の三寶を高く持ち婿の前に進み二品を挟み左手を右手首に添へて進む、婿は懐紙を兩手に擴げ受けて右側に置く、兩酌人は同時に立ちて行違ひに交代して酌人は前の如く婿に盃を進め酒を注ぎて加へに立つ、加酌人は二品を進める、付添人は懐紙に受けて嫁の左側に置く、加酌人は退きて銚子と取替へ前の如く加酒をします。酌人は婿の前に進み三の盃と組替へをして更に婿に進め注ぐ〔此時三番の謠曲〕又嫁の前に進み前同様に進めます、之にて三三九度の盃が終ります、盃を元の如く組み替へ銚子三寶を持ちて静に退きます、加酌人は銚子を持つて途中に迎へ蝶を合せ酌人の後について退きます、婿は先きに退席する此時嫁は黙禮して見送り續いて付添人に手を取られ退きます、之れで目出度終りを告げるのであります。

本式婚禮式

神前の御酒を長柄の銚子と提子ひょこに移し準備が出来ますれば、仲人夫婦は正座に着席します新婦は介添人に手を取られて假り席につきます、新郎は待女郎又は付添人の案内にて入席し神前に着座する、新婦は介添人と共に新郎の左方に着座して同時に禮拜します、終つて新郎は褥の上に着席し新婦もつゞいて着席する、給仕人は二人同時に初献くせんの膳（白木三寶に長熨斗のし）を双方に進めます、本酌人は長柄の銚子を右手に持ち母指にて星を押へ、左手にて足を持つ、加酌人は提子ひょこを右手に持ち左手を前下にあてる、土器盃の三寶は別に一人が持つ、さて本酌人は右に、盃の三寶は左に並んで進み中央に止りて前に置き同時に一禮して共に新郎の前に座り、三寶を進め少し退りて新郎が三寶を戴かるゝ時に一禮する、本酌人は盃さきに少し注ぐ（一番の謠曲）飲まるれば又注ぎ、加酒に立ち歸りて又注ぐ合せて三献になります、本酌人先きに進み盃の人つゞいて新婦の前に座り盃を進める介添人は三寶を戴き盃を新婦に渡す、本酌人は新郎と同様二献注ぎて加へに立ち歸りて又注ぎます合せて三献になります、（加へ酒の仕方は略式と同じであります）そして盃の三寶を持ちて神前に進み略式と同様に組替へして新婦の前に戻ります、給仕人は二人にて二献の膳（手前に餅雑煮、右向ふに田作盛、左向ふに梅干盛）を双方同時に初献の膳の前に進め

ます、そして滴土器したみかろけを双方の右側に進めます、さて二の盃を新婦に參らせます（二番の謠曲）其仕方は前同様であります、お酒を飲み餘す時は介添人は滴土器したに滴みます、酌人二人は新郎の前に進み前の様に二献注ぎて加へて又一献注ぎ盃の方は神前に組替へに立ちます、此間に給仕人は三献の膳（手前に鯛の鱗吸物、右向ふに昆布左向ふに勝栗又は鯛）を双方二献の膳の左側に並べます、三の盃は新郎より致します（三番の謠曲）凡て前同様で終りまして二人は神前に進み盃の組替へをして共に一禮して退きます、加酌人は途中に迎へて銚子と提子の雌雄蝶を一寸ちよつと合せ右廻りを大きく一廻轉して（結び酌と云ふ）盃の三寶を先頭に本酌人、加酌人の順序に静に退きます、給仕人は三献の膳から出した時の反對に順々に双方同時に引きます、新郎の立たるゝ時は新婦は褥をすべりて黙禮致します續いて新婦も立ち、新夫婦揃ふて祖先の靈へ拜禮しまして暫く休息致します。之れ迄仲人夫妻は見届けて双方の兩親へ目出度式を終りたる旨を述べます。

御熨斗のしの出し方

御熨斗は古からお祝ひの席には必ず出す事になつてゐます、此由來については日本

紀、倭名抄、平治物語、東鑑、古器評等の本に書いてありますが古禮には、のし蛇ノシヘビは神代の人形なり肩いかりて腰細く壽じゆは百歳を保つ云々とあり、古事記には、天照皇太神伊勢の國五十鈴の川上にて神代之人形を學せ給ひ鬘斗製云々とありますが、が要するに蛇をのして薄くなじ作りしもので古來からあつたものでありますが、足利時代から何の祝賀にも之を用ふる事になつて其習慣が今日に及んだものであります。さてお鬘斗は三枚、五枚、七枚と奇數を重ねて元を紅白の紙にて包み金銀の水引にて飾りを作つて結び白木の三寶に先方より見て頭が左手にある様載せ（三寶の胴の合せ目がお客の膝に向く）龜か貝の文鎮などで押へをします。

お鬘斗は列席の人へ一々進めるものでありますが最も慎重に致します故、時間を要しますので今日では略して皆の人が同時に戴く事になつたのであります、左に詳しく述べる事に致します。

此大役を勤むる人は正装して嚴肅げんしゆくに過失のない様に充分注意して爲さねばなりません、扱て三寶を持つには胴の合せ目を向ふにして前に座り、右手の指尖ゆびさきを右穴に少しかけ左手を前の穴に入れ掌を底にあて、右手の母指ははゆびを縁へりにかけ、食指、を中指底さしにあて紅指、小指を穴にかけ靜に立ちて目八分に捧げます。入席する少し手前にて一寸右膝を跪ひざまつき前方の位置を見定め、靜に立ちて進み中央に止り上座（床のある方）の足を少し引き右左膝と座して三寶を下して右手を穴にかけ左手を抜き兩手を胴にあて、少し上げて四五寸前に置き兩掌うでを迎むかひ指尖さきにて少し押し進め、兩手を揃へて前につき、右手右膝と引き、左手左膝と引き、腰を卸して姿勢を正し、正座に注目して鄭重に一禮致します、此時列席の人は皆同時に戴く心持ちにて禮を致します。頭を上げて兩手を前につき左右膝と進み三寶の胴を持ち少し上げ引寄せ、最初示したる通りに持ちて上座の方に廻りて靜に退きます。

親子の盃

新婦は介添人の案内にて席に入り假席に着きます、續いて兩親入席褥の上に着席します、給仕人はお鬘斗を進める一同禮して後に初對面の挨拶を致します、そして新婦は褥の上につきます、給仕人はお吸物膳と滴土器を進めます、酌人は右手に銚子右手に三つ組盃の三寶を持つて出で中央にて一禮して、父の前に座り酌をして嫁の前に参り進める、此時給仕人は錫昆布を嫁に進める、盃を組替へて二の盃を嫁に進め又父に進める此時錫昆布を父に挟む、盃を組替へて父に進めて終る之を二献三献と

云ふ、目上の者三献、目下の者二献の禮であります。今度は更に母より始めます凡て前同様であります、介添人は盃を取次ぎ又は残りの酒を滴めるなど萬事氣をつけます。

尚ほ處に依つては兄弟妹の盃をも此時に致ます順序は同じであります。

總 客 席

仲人夫妻は正座、婿方一同下座につき、嫁方一同上座に着席します、凡て順序は名札が配つてありますから夫れに依つて着きます、給仕人は前に示した通り慎重にお熨斗を進め一同受けられて引きます、此間に仲人は婿方列席の上座から順々に名前や血族關係、職業等を嫁方に向つて紹介し終つて嫁方を同様紹介します。給仕人は正座から茶菓を進め(此時世話人又は仲人は下座から茶菓召しませの挨拶を致ます)一同終つて引き直に本膳を運びます(お箸をお取りませの挨拶)御飯がすみし頃二人の酌人は右手に銚子、左手に盃の三寶を持ち出で一人は嫁方、一人は婿方の上座から順々に冷酒を廻します、一順終つて婿方下座の盃を嫁方上座に、嫁方下座の盃を婿方上座の客に納め各一献して終ります。(略すれば引盃とて各人の本膳に一つ宛

朱塗の盃を備へ付け、二人の酌人は左右の上座から順々に冷酒を注いで廻ります)此間に給仕人は二の膳、三の膳、俊羹等を付けます、そして湯桶は次ぎの室に置き飯碗を受けて湯を注ぎ進めます、一同食事がすみますれば、下座の方から出した時の反對に順々にお膳を引きます、之で式は終りますから一同休息して羽織袴を脱いでも宜ひのであります。

暫くして給仕人は會席膳を運び一同着席されて燗酒を進めます、此席にては仲人夫妻に對して永々の勞を慰るのであります、仲人は此宴に達して始めて安神し得るのであります。今日では新郎新婦は此席が終つて新婚旅行に出立ちます。

寢 所 の 盃

床には鶴鶴臺(造り物)を飾り肴は芋の子、數の子等にして、燗酒の銚子には和合蝶ごて雄蝶雌蝶を合せたものを飾ります、さて總會席の宴が餘り夜更けますれば仲人の妻は氣をきかして新夫婦を寢所に導きて、双方にお酒を進める此際兩人は自分の理想や趣味等を語り合ふのであります。

婚禮式も之で終りを告げますが解り易い様に簡單に左に順序を示します。

盃の順序一覽

里出の盃

- 一の盃 父一献いん 娘一献 母一献 (盃組かへ)
 - 二の盃 母一献 娘一献 父一献 (盃組かへ)
 - 三の盃 娘一献 父一献 母一献 (盃組かへて終る)
- 父母娘の順に鯛、昆布を挟む。

三三九度の盃【正式】

- 一の盃 婿二献加へて一献 嫁二献加へて一献 (盃組かへ)
 - 二の盃 嫁二献加へて一献 婿二献加へて一献 (盃組かへ)
 - 三の盃 婿二献加へて一献 嫁二献加へて一献 (盃組かへて終る)
- 謡曲は各盃の始めに一番づゝ。

同上【畧式】

- 一の盃 婿三献 嫁三献 (加へて。盃組かへ)
- 二の盃 嫁三献 婿三献 (加へて。盃組かへ)
- 三の盃 婿三献 嫁三献 (盃組かへて終る)

但し一の盃を嫁より始める家風もあります此場合は順序に變りはありません。

親子の盃

- 一の盃 父一献 嫁一献 (盃組かへ。父に鯛、昆布)
 - 二の盃 嫁一献 父一献 (盃組かへ。嫁に鯛、昆布)
 - 三の盃 父一献 (盃組かへて終る)
- 但し母及兄姉は右に同じ、弟妹は嫁より始めます。

寢所の盃

- 盃は一つ 婿一献 嫁一献 婿一献 (終る)

總客席の盃

- 一の盃 嫁方父一献以下順々婿方父に納むる
- 二の盃 婿方父一献以下順々嫁方父に納むる
- 三の盃 最後に仲人一献して挨拶して納むる

婚禮式の献立 【正式の一】

御長熨斗

- 初 献 熨斗鮑九枚重ね本を紅白の包紙にて包み金銀水引にて梅花又は鮑結にて飾り、頭を客の左方に向け白木の三寶に奉書二枚重ねの上に横へて載せる。
- 一尺の白箸に耳土器をつけ、手前に熨斗五切、右向ふに昆布五切、左向ふに勝栗五つ、何れも小角に平甲立を飾りて白木の三寶に配置する。
- 二 献 箸も三寶も前に同じ、手前に五斗土器下輪に餅吸物、右向ふに田作盛、左向ふに梅干盛、何れも大重下輪に桔梗甲立を飾る。

三 献

箸も三寶も前に同じ、手前に間土器下輪に鯛の鮓吸物、右向ふに鳥盛、大重下輪に蝶甲立を飾る、左向ふに五種盛、龜甲角に甲立を飾る。

滴土器は片木に載せる。

同 【正式の二】

- 初 献 長熨斗は凡て前に同じ。
- 二 献 白箸に耳土器、本膳にして、手前には朱塗の椀に餅吸物、右向ふには皿に田作盛、左向ふには皿に梅干盛。
- 三 献 箸膳前に同じ、手前には朱塗の椀に鯛の鮓吸物、右向ふには皿に昆布、左向ふには皿に鯛又は勝栗。

同 【略式の一】

- 初 献 長熨斗の手前に右に昆布、左に鯛をのせる之を引渡兼と云ふ。
- 二 献 本式に同じ。但白箸又は朱塗。

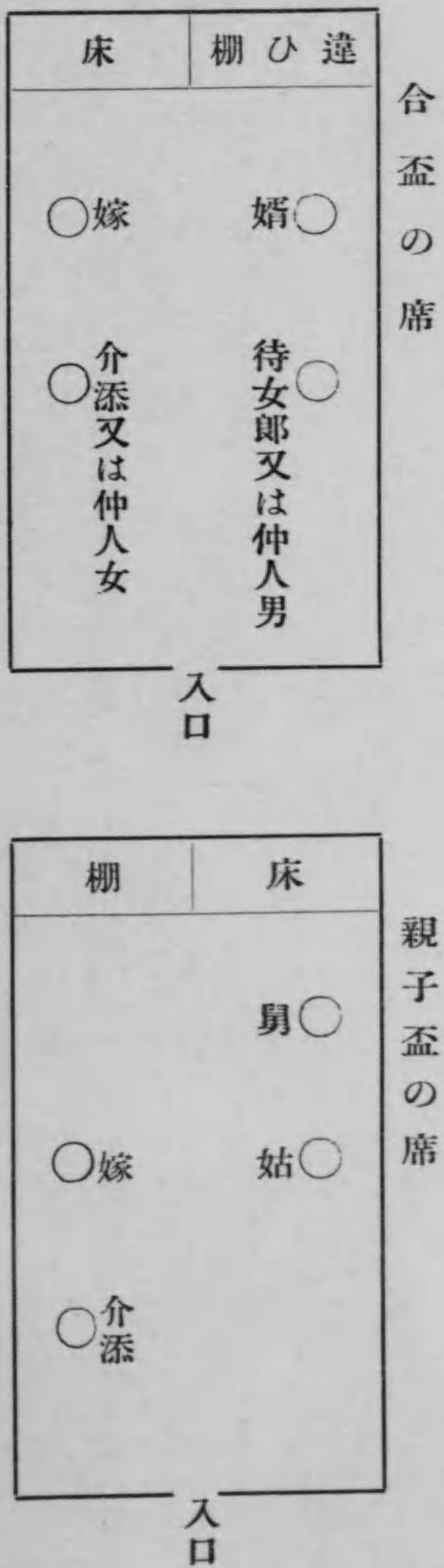
三 献 鯛の鮓吸物一つ。箸同じ。

七〇

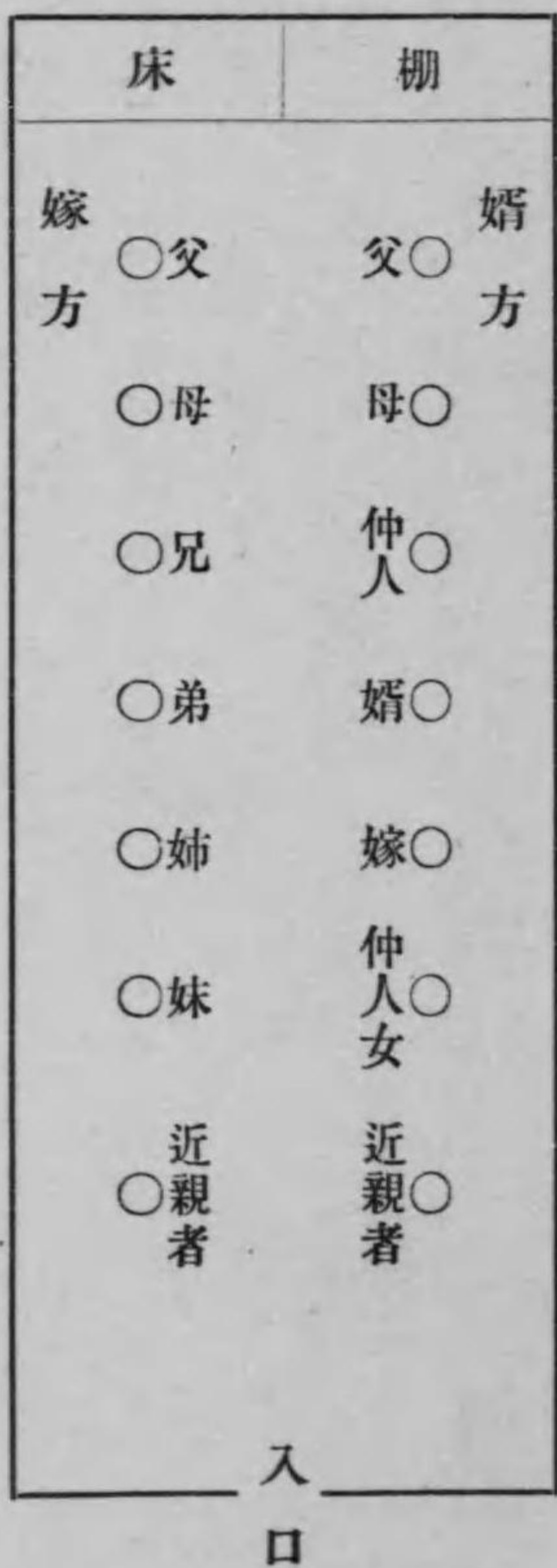
同 【略式の二】

長熨斗を出して次に本膳（餅吸物、田作、梅干盛）のみにして、中で鯛、昆布を挟む。餅吸物の代りに鮓吸物にても宜し。

座席の配置圖解



總客席



此席は家風に依つて相違があります。然し日本在來の禮として左方を上座としてあります。

合盃正式の順序 【本式も略同じ】

- 第一 新婦は介添人案内して入席假座につく
- 第二 新郎は侍女郎案内して入席神前着座
- 第三 新婦は介添人案内して新郎の左に着座
- 第四 御神へ双方同時に禮拜
- 第五 新郎は褥の上に着席
- 第六 新婦は介添人案内して褥の横に着席
- 第七 御長熨斗を出す

七一

- 第八 初對面の挨拶 (新婦より黙禮する)
 - 第九 新婦は袴の上に着席
 - 第十 初献の膳 (一番謠曲)
 - 第十一 三つ組土器盃三寶
 - 第十二 長柄の銚子 (盃事始まる)
 - 第十三 提子
 - 第十四 二献の膳 (二番謠曲)
 - 第十五 滴土器
 - 第十六 三献の膳 (三番謠曲)
- 右にて御盃事相すみ
- 第十七 盃三寶、銚子、提子を引く
 - 第十八 三献の膳引く
 - 第十九 滴土器引く
 - 第二十 二献の膳引く
 - 第二十一 初献の膳引く

- 第廿二 御土産物の披露
 - 第廿三 御小袖の披露
 - 第廿四 介添人下座にて「御目出度御座います」と述ぶるを千秋萬歳の御挨拶と云ふ
 - 第廿五 酌人一同次席にて一禮す
 - 第廿六 新婦は褥を下る
 - 第廿七 新郎退席待女郎案内す
 - 第廿八 新婦退席介添人案内す
 - 第廿九 新郎新婦連れ立つて祖先の靈へ禮拜
 - 第三十 双方休息
- 之にて終る右は小笠原流の古來の正式でありますから現今では少し略してゐるのであります。古から婚禮當夜の忌言葉として慎まねばならぬ事を左記致します。
- 離れる、別れる、切る、去る、返す、戻す、歸る、等であります、此意味から歸る事をお開きと申すのであります。

第八節 高等科

七四

貴人の前に伺候

高位高官の御方に拜謁又は御召しに依つて伺候する場合は、申迄もなく相當の服裝をなして、過失ない様に充分注意して慎まなければなりません、至極高貴の御方でありましたれば椅子にお掛けあそばしてゐらるゝ時でも疊の上にては座禮を致します、西洋室又は室外では立禮で宜しい。

座禮

次室の闕手前に座し一禮して兩手を闕向ふにつき左右膝と進み、又兩手をつき進み三度に進みて姿勢を正し最敬禮を致します、若し近ふくと御許しがありますれば更に三進致します、御言葉が下りますれば兩手を膝前に三寸位距て、突き謹聽致します、終りますれば右手左膝、左手右膝、右手左膝と退き四度目に足を揃へまして最敬禮を致し、又前の様に三度に退り闕の外に出で一禮して靜に返ります、進む退く

も三度にします、之れを三進三退の禮と申します。

立禮

次室の闕手前にて上位に對する禮を致しまして兩手を前股にあて、左右左足と進みて室内に入つて姿勢を正しくして、最敬禮を致します、御召しが下れば再び三進しまして謹みて言上するか、お言葉を聞きます、終りますれば左右左足と退り、最敬禮を致し、再び右左足と闕外に退り一禮して退きます、立禮にをきましても三進三退を禮と致します。

卓上に茶菓の進撤

お茶は高茶臺（天目とも云ふ）に湯呑を載せ蓋をなして、右手にて足を持ち、左手の四指にて湯呑を支へ、小指は縁の下にあて息のかゝらざる様に高く捧げて進み、卓の三尺前に止り敬禮をなして左右左足と進みて卓の手前上に置き兩手にて縁を持ち（母指上に四指下に）貴人の右前に進め、兩掌を上向け手の甲を卓にすらせ僅に押し參せる、右左右足と退き最敬禮して、右左足と後退りして次室に出でます。

七五

お菓子が高付臺に敷紙をして盛り、右手にて足を持ち、左手母指を縁にかけ四指を下にあて高く捧げて静に進み、三尺前に止り敬禮して左右左足と進みて、卓上に置き両手にて縁を持ち貴人の正面に置き進める以下天目臺の進め方と同様であります。

扇子に物品を載せ奉る禮

短冊など参らするには、扇子兩端の小骨各一本を残して開き、其上に字頭を手前に眞直に載せ、乳の高き位に右手にて要の處を持ち左手母指を上、四指を下にあて親骨が胸と平行する様に捧げて進み、三尺位手前に座り一禮して左右左膝と進み頭を下げて差上げます、短冊をお取りになりますれば、右左右膝と退り右手の甲を疊につけ斜に持ちて、左手を下げ食指と中指にて小骨を一本づつ閉ぢ、最後の親骨は右手の食指にて閉ぢ最敬禮して右方斜に倒し左手の中指に立て他の指は揃へ、右手母指と食指にて要を押さへ三指は揃へて持ち、静に立ち右左足と退歩して次室迄退き右廻りして歸ります。

軸物取扱方

軸物を懸け替ゆる時は、軸物の中央を左手母指を上、四指を下にして持ち、右手の小指と紅指とにて鶯竿を押へ持ち、他の三指にて軸を握まむ様に持つて、床の間の六尺位手前に座りて、鶯竿を置き両手にて軸物を右側に置き、更に鶯竿の中央上を右手にて持ち進み床の前に座り軽く一禮して、鶯竿を向ふ壁に立てかけ懐紙を出して廣げて、床疊に敷き其上に左右膝と跪き、両手にて軸を取り静に巻き上げ、手の及ばぬ様になれば、左手をすらして中央を持ち、右手に鶯竿を取りて立ち、左手の小指に竿を挟み、右手を下げて竿の下端を持ちて上端にて掛緒を挟み、はづして右左足と一間許り下り、其儘疊に置き竿を右側に置き両手にて軸を持ち巻く（膝を進めます、軸物を引寄せてはいけません）露（風帯の端にある糸）を持ちて風帯を疊みて巻き終つたならば、左手にて中央を持ち右手にて巻緒を中央に寄せ、三巻して引きほごきに挟み右側に置きます。さて懸けるには最初持ち出でし軸物の中央を左手に持ち、右手にて巻緒を解き右に寄せ、懸緒を取つて両手とも前に伸べ、疊に置き両手にて軸を持ち少し廣げ、露を摘みて風帯を伸べ、軸を持ちて手前に廣げ右手に鶯竿の下部を持ち懸緒を挟み、左手に軸物の中央を持ちて進み、床の間の敷紙の上を立て、懸緒を釘にかけ竿を左手の小指に挟みて取り直し壁に立てかけ、兩軸を

持ちて廣げ終り懷紙を懷に入れ、鶯竿を持ちて三尺位退り竿を右側に置きて、軸物の懸り工合を見て歪があれば、竿にて直し、正しく懸つてゐれば軽く一禮して少し退り、取替へた軸物を最初の様に持つて退きます。

卷緒は一幅の時は右に、二幅の時は左方は左に、右方は右に寄せます、三幅の時は中は右に寄せ左右は前同様にします。

懸け方は二幅の時は客位、主位とかけ、三幅の時は中央、客位、主位の順序にかかります、客位とは書院のある方即ち上座であります。

床の間の視方

床の間の三尺位手前に座り一禮して、軸物を視るには風帶、天、一文字、兩側、地、軸と見て、人物、花鳥、山水等は下より見上げ、書は上より讀み、落款を見ます。

三幅の時は中央、主位、客位の順序に見る、主位を先きに見るは主人を尊敬するの意味であります、違棚にある卷物を見るには、主人に一應挨拶して、取り卸し上座を向いて座り、左手に中央を持ち右手にて卷緒を解き、少し廣げ卷緒を下から内に上から外にかけ疊に置きて、左手にて廣げ見る、右方に運びて右手にて内に巻き又

左手にて次ぎに廣げ見る、見終れば左手にて巻き、左方に運びて又巻き終つて卷緒を元の通りに巻き、引ほごきに挟みて棚に返して主人に一禮します、凡て開くも巻くも疊に擦らせてはいけません。

生花を見るには花器臺、花器、水ぎわ、眞、添、體の順序に三尺位隔て正面から見ます、生花は右或は左に寄つて見ては位置が違つて、眞の形が見へません、のみならず無禮になります。

専門外にはなりませんが生花の位置を附手に述べます、軸物の三幅對の時は右又は左方に（活方の陰陽に依つて違ひます）二幅對の時は中央に、一幅の時は活方に依つて右或は左方に置きます、要するに中央にある床置物を避けて又書畫の隠れない様に注意します。

尚ほ軸物の繪が草花等であつた時は同じ花を活けない様に又軸物は祝賀の時は鶴、松、蓬萊山、七福神等をかけ、春は春の繪、秋は秋の景色等をかけ、夏季に雪景色の繪はかけないものであります。

◎本院卒業及婦人會講習會

| 區別 | 人員 | 終了年月日 |
|---------------|-----|--------------|
| 第一回 糸島郡可也村 | 四四人 | 明治四十一年十二月二十日 |
| 第二回 糸島郡加布里村 | 一七人 | 同 四十二年二月十三日 |
| 第三回 糸島郡加布里村 | 四八人 | 同 四十二年三月十四日 |
| 第四回 糸島郡加布里村 | 二〇人 | 同 四十二年四月一日 |
| 第五回 糸島郡加布里村 | 五一人 | 同 四十二年五月十六日 |
| 第六回 糸島郡加布里村 | 五四人 | 同 四十二年七月十一日 |
| 第七回 糸島郡加布里村 | 二〇人 | 同 四十二年八月十四日 |
| 第八回 糸島郡加布里村 | 二四人 | 同 四十二年十月十七日 |
| 第九回 糸島郡加布里村 | 二四人 | 同 四十三年三月六日 |
| 第十回 糸島郡加布里村 | 七二人 | 同 四十三年三月廿五日 |
| 第十一回 糸島郡加布里村 | 二三人 | 同 四十三年四月九日 |
| 第十二回 糸島郡加布里村 | 三六人 | 同 四十三年五月七日 |
| 第十三回 糸島郡加布里村 | 四六人 | 同 四十三年五月廿二日 |
| 第十四回 糸島郡加布里村 | 二〇人 | 同 四十三年六月十二日 |
| 第十五回 糸島郡津屋崎 | 二四人 | 明治四十三年八月一日 |
| 第十六回 鞍手郡直方町 | 七人 | 同 四十三年八月廿二日 |
| 第十七回 鞍手郡直方町 | 六一人 | 同 四十三年十二月十八日 |
| 第十八回 朝倉郡栗田村 | 百三人 | 同 四十四年三月廿二日 |
| 第十九回 朝倉郡栗田村 | 四〇人 | 同 四十四年四月廿四日 |
| 第二十回 朝倉郡栗田村 | 三八人 | 同 四十四年七月九日 |
| 第二十一回 福岡縣縫女學校 | 二三人 | 同 四十四年七月卅一日 |
| 第二十二回 福岡縣縫女學校 | 一〇人 | 同 四十四年八月廿九日 |
| 第二十三回 夏期講習 | 二一人 | 同 四十四年九月廿一日 |
| 第二十四回 粕屋郡篠栗町 | 六七人 | 同 四十四年十二月十七日 |
| 第二十五回 糸島郡加布里村 | 一六人 | 同 四十五年二月十五日 |
| 第二十六回 糸島郡加布里村 | 三九人 | 同 四十五年三月廿四日 |
| 第二十七回 福岡縣縫女學校 | 一四人 | 同 四十五年四月十日 |
| 第二十八回 早良郡金武村 | 三八人 | 同 四十五年四月十八日 |
| 第二十九回 早良郡金武村 | 五二人 | 同 四十五年七月十四日 |
| 第三十回 糸島郡雷山村 | 二〇人 | 大正元年九月十九日 |
| 第三十一回 宗像郡津屋崎 | 一三人 | 同 元年十月廿七日 |

| | | | | | |
|--------|------|------------|---------|------|------------|
| 筑紫郡野多目 | 一五人 | 大正元年十二月十八日 | 糸島郡長糸村 | 五〇人 | 大正二年七月廿七日 |
| 第十四回 | 五〇人 | 同 元年十二月二十日 | 福岡裁縫女學校 | 二六人 | 同 二年八月七日 |
| 糸島郡周船寺 | 三二人 | 同 元年十二月三十日 | 糟屋郡席内村 | 一一九人 | 同 二年九月十五日 |
| 同 福吉村 | 四七人 | 同 二年一月十日 | 早良郡曲淵村 | 二七人 | 同 二年十一月廿八日 |
| 同 北崎村 | 三五人 | 同 二年一月廿九日 | 同 入部村 | 四五人 | 同 二年十二月六日 |
| 同 今津村 | 五四人 | 同 二年二月十五日 | 同 石釜村 | 三二人 | 同 三年一月廿八日 |
| 糟屋郡新原村 | 二二人 | 同 二年三月九日 | 同 内野村 | 四一人 | 同 三年二月五日 |
| 同 青柳村 | 三二人 | 同 二年三月九日 | 糟屋郡酒殿 | 三九人 | 同 三年二月十三日 |
| 同 米多北 | 三六人 | 同 二年三月廿日 | 同 袖須 | 二三人 | 同 三年二月十九日 |
| 同 小山田 | 三〇人 | 同 二年三月廿五日 | 同 上ノ原 | 一六人 | 同 三年二月十九日 |
| 同 谷山 | 五人 | 同 二年三月廿五日 | 同 原田 | 一七人 | 同 三年二月廿四日 |
| 同 藥生寺 | 二六人 | 同 二年三月廿九日 | 同 原町 | 三二人 | 同 三年二月廿五日 |
| 同 大川村 | 二三六人 | 同 二年四月六日 | 同 河惠 | 二〇人 | 同 三年二月三十日 |
| 同 勢門村 | 二八人 | 同 二年四月十日 | 同 四軒屋 | 二一人 | 同 三年三月五日 |
| 同 多々良 | 四六人 | 同 二年四月十三日 | 同 甲仲原 | 四一人 | 同 三年三月十日 |
| 糸島郡野北村 | 九一人 | 同 二年四月廿八日 | 同 乙仲原 | 三五人 | 同 三年三月十五日 |
| 第十五回 | 五四人 | 同 二年七月六日 | 第十九回 | 六七人 | 同 三年三月十五日 |

| | | | | | |
|--------|-----|-----------|-----------|------|------------|
| 糟屋郡田富 | 一九人 | 大正三年三月廿一日 | 筑紫郡水城村 | 二〇人 | 大正三年十月十四日 |
| 同 志免村 | 五四人 | 同 三年三月廿六日 | 同 通古賀 | 三一人 | 同 三年十月廿日 |
| 早良郡原村 | 二三人 | 同 三年三月廿五日 | 第十七回 | 一〇〇人 | 同 三年十一月廿二日 |
| 同 田隈村 | 二七人 | 同 三年三月卅日 | 糸島郡櫻井村 | 七七人 | 同 四年二月十日 |
| 糟屋郡南里 | 三七人 | 同 三年三月卅一日 | 早良郡金武村 | 四四人 | 同 四年四月五日 |
| 同 別府 | 四一人 | 同 三年三月卅一日 | 同 原村 | 六八人 | 同 四年四月十日 |
| 同 御手洗 | 三〇人 | 同 三年四月五日 | 朝倉郡夜須村 | 三七人 | 同 四年五月八日 |
| 同 吉原 | 三〇人 | 同 三年四月六日 | 糸島郡小富士村 | 六七人 | 同 四年六月六日 |
| 同 旅石 | 三一人 | 同 三年四月十六日 | 筑紫郡住吉町 | 七人 | 同 四年七月十日 |
| 同 乙植木 | 二四人 | 同 三年五月三日 | 遠賀郡長津村 | 六一人 | 同 四年八月廿日 |
| 筑紫郡武城寺 | 一六人 | 同 三年五月八日 | 第十八回 | 四二人 | 同 四年十月九日 |
| 同 二日市 | 一三人 | 同 三年九月十九日 | 第十九回 | 七〇人 | 同 四年十二月十五日 |
| 糸島郡四ノ堂 | 三七人 | 同 三年九月廿一日 | 第二十回 | 六三人 | 同 五年三月廿六日 |
| 同 川原 | 一三人 | 同 三年九月廿六日 | 佐賀縣杵島郡小田村 | 一四人 | 同 五年六月十八日 |
| 同 高來寺 | 一二人 | 同 三年十月一日 | 筑紫郡日ノ口村 | 一一人 | 同 五年九月十五日 |
| 糟屋郡立花村 | 四六人 | 同 三年十月六日 | 糟屋郡勢門村 | 二九人 | 同 五年十二月廿九日 |
| 糸島郡高野上 | 一九人 | 同 三年十月六日 | 糸島郡北崎村 | 四八人 | 同 六年二月廿三日 |

| | | |
|---------|-----|------------|
| 第二十一回 | 八七人 | 大正六年五月六日 |
| 第二十二回 | 八〇人 | 同 六年八月二十日 |
| 糟屋郡篠栗村 | 八三人 | 同 六年九月五日 |
| 第二十三回 | 三〇人 | 同 六年十月廿五日 |
| 糸島郡加布里村 | 三六人 | 同 六年十月卅一日 |
| 第二十四回 | 一九人 | 同 六年十二月二十日 |
| 糸島郡前原町 | 六三人 | 同 七年三月十日 |
| 同 野北村 | 五六人 | 同 七年三月十八日 |
| 第二十五回 | 三二人 | 同 七年四月三十日 |
| 第二十六回 | 四五人 | 同 七年七月十日 |
| 第二十七回 | 五二人 | 同 七年十二月十八日 |
| 第二十八回 | 六九人 | 同 八年四月廿二日 |
| 第二十九回 | 四八人 | 同 八年七月廿五日 |
| 粕屋郡席内村 | 八七人 | 同 八年十月十日 |
| 糸島郡前原町 | 四四人 | 同 八年十一月二十日 |
| 同 深江村 | 五〇人 | 同 八年十一月廿九日 |
| 第三十回 | 一四人 | 同 九年二月廿五日 |

| | | |
|--------|------|------------|
| 糸島郡福吉村 | 三七人 | 大正九年三月十九日 |
| 同 一貴山村 | 二六人 | 同 九年四月十八日 |
| 第三十一回 | 一四人 | 同 九年五月十五日 |
| 第三十二回 | 三五人 | 同 九年七月十日 |
| 第三十三回 | 二八人 | 同 九年十二月廿一日 |
| 粕屋郡立花村 | 三〇人 | 同 十年二月十四日 |
| 糸島郡櫻井村 | 三六人 | 同 十年二月十九日 |
| 同 今津村 | 二六人 | 同 十年二月廿四日 |
| 宗像郡東郷村 | 一〇三人 | 同 十年三月十四日 |
| 筑紫郡千代町 | 七二人 | 同 十年七月十三日 |
| 第三十四回 | 三三人 | 同 十年七月二十日 |
| 第三十五回 | 一四一人 | 同 十年十二月十八日 |

禮節學修院

總人員五千三百二十九人

(大正十年十二月末現在)

大正十一年二月二十三日印刷
大正十一年三月二十五日發行

作法の葉
定價金 八拾錢

不許
複製

著者兼 發行 萩原 薦
福岡市船町三十番地

印刷者 山田 純一郎
福岡市中土居町六番地

印刷所 山田 印刷所
福岡市中土居町六番地

電話 一〇一八番
振替 福岡五四六六番

發兌 禮節學修院
福岡市船町三十番地

11
560



終

